教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年九月一日発行　毎月一日発行　第九巻第九号



9

教会の教育的使命

1961

1961 **9** 目 次

日本基督教団

本所緑星教会



この教会は、旧福音教会のもっとも古い教会、神田錦町教会の下町伝道講義所からはじまった棟割長屋を打抜いた借家住いの、いかにも下町風のものだった。震災と戦災によって、二回も壊滅的打撃をうけたが、昭和三一年、写真のように美しいコンクリート会堂が建てられた。戦災によって牧師を失い、離散した会員たちであったが、真面目で直撃な牧師の地味な牧会によって培われた信仰は七度火爐で精錬された金のように、力強く戦後下町教会の宣教の一翼をにないつつある。会堂、牧師館はP・Sメイヤー師の尽力によりEUBボードから五〇〇万円を、そして献金四〇〇万円をもって、戦災死された広野捨二郎牧師の記念会堂として建てられた。現在は入江義伸牧師が牧会に当っている。教会六〇週年記念事業として、来年は附属館を建てる計画を実施中。

終戦直後の会堂



教会における
キリスト教教育

聖書　テモテ　3. 10 —— 405

解　説

テモテへの手紙は、教会における組織のはじめを云い聞かせているものであるために、感激的読物ではない。急激な、また拡大な伝道活動によって多くの人々を教会に導いたが彼らのほとんどは、あまりよく訓練されていなかった。善意ではあったが無知であるためにあらゆる場合に教会の名誉を傷つけるようなことが多かった。そのため牧会書簡に見られるような常識的な話し方で教育する必要があった。

教勢を更新する最良の方法は、「パウロ」をおぼえることであった。テモテはパウロの教えに従った。彼はパウロのうけた迫害や艱難をおぼえると共に彼の教えたこと、そのなしたことを思い起させた。パウロは常に信仰と愛と寛容と忍耐とをもって教えた。

テモテは恵まれた境遇にいた。つまりその母ユニス（Ⅱテモテ一・五、使徒一六・一）祖母ルイスを我々は思い出す。彼は子供の時から聖書に親しんでいた。彼は教師から教えられた事を守ることを求められ、特に当時、無知と異端とがはびこり出したこともあって、はじめからの正規の教えに頼っていくよう教えられている。

「すべて神の霊感をもって書かれたものに信仰を保ち、教え、義に導く訓しとして貴重なものである」（Ⅱテモテ三・一六　ワンド訳）。イエス・キリストの信仰を通して、み言は、教師を有能にする。それは教師をその任務にふさわしいようにするからである。これは多分旧約についてだけいわれたものであろう。（しかし初代におけるキリスト教の書き物についても）とにかく我々にとっては、聖書は教会を教えるためにどのように用いるべきかを示している。特にこれは教育ばかりでなく信仰の擁護のため、学ぶものの信仰を育てるため、そして人々が神の御心を知るため助けとなるものであったことを注意すべきである。

テモテに与えられた神の教えは、神が彼の審判者であることを示している。時代は荒んでいて人々は「自分勝手な好みにまかせ」（グッドスピード訳）て教師を選んでいたから、彼は気をゆるさずに励んで「責め、戒め、勧めて、あくまで寛容な心で教えることをやめてはならない」（ワンド訳）と、それは彼の使命の〝遂行〟を命ぜられたのである。

ここで強調されていることは、教えることであるが、これにはもちろん説教もこの中に含まれている。教えることを含んでない宣教はなく、宣教のない教えはあり得ない。両者

世界キリスト教教育研究会議の課題

教会の教育的使命

ランドルフ・C・ミラー

教会の教育的使命を研究するに当り

これは、教会の教育的使命についての検討である。聖書から選びぬいたいくつかの聖句に基いて、教会の性格を検討し、その見地からキリスト教教育の基盤について語り、さらに牧会区全域にわたるプログラムとその任務であり、地方教会区の任務である日曜学校中心について考え、また家庭生活との関連、そして青年たちに対する責任等、教会の教育的使命を解明するのである。

この研究の背景をなす基本的な仮定は二つある。その一つは、教会はまず聖霊の共同社会であること、その二は教育というものは、一つの共同社会において行われるものであるということである。この結論は、個々の教会の会衆の中で経験される教会の性格が、そこにおけるキリスト教教育の内容を決定するということである。こうした考え方が、われわれの牧会区の生活の性格を検討して、改新の根源をつきとめさせることになる。

その方法は極めて簡単である。すなわち研究会ごとに聖書の一部を研究することに始まり、これについての短い解説がある。つづいて、その聖書研究と教会の教育的使命に関して、なお一層充実した考え方を展開することが出来るような、いくつかの問題を考える。

このStudy Guideは、私が「キリスト教教育と教会」Christian Nurture and the Church (Scribners) を書いていたと同じ時に、ウェルズのハワーデン市にある聖ディニオール図書館で書かれた。このGuideの中には、この著書にあると同じところがあるがGuideの中に示されている見地は、「キリスト教教育の手がかり」The Clue to Christian Education (Scribners) および「聖書神学とキリスト教教育」Billical Theology and Christian Education などの拙書中にも見られるものである、そのアプローチについては「キリスト者の生活への教育」Education for Christian Living (Prentjc-Hlal) にある。

これについては、Howard Grines : The Chund Redemptive (Abengdon)「贖いの教会」Marjorie Reeves; Growing Up in Modern Society (University of London)「近代社会の中での成長」Paul H. Vieth The Church School (Christian Education Press)「教会学校」Lowis J. Sherill; The GiFt of Power (MaCmillan)「力の賜物」Sara Little; Learning Together in the Christian Fellowship (Jhon Knox)「キリスト者の交りにおいて共に学ぶ」等が同じような見界をもっている。

求道者が子供であろうと大人であろうと、このようなものの理解があらゆる場合に常に行われなければならないのである。

二　啓　示

マタイ　一一・二五
ロ　マ　一・一七
コリント　二・一〇

啓示についての自分の考え方は、その人のキリスト教教育についての考え方に影響する。もし私が啓示されたものは、神御自身のみ言であり、聖書に文字通りに、そのまま与えられたものであると信じれば、キリスト教教育についの私の見界は、これらの言を、そのまま、なるべくたくさん憶えることにあるだろう。そしてこれは、たとえ、その目的とするところが「救いの真理」であっても、教理信条を教えること、それが目的ということになる。

あるいは、もし私が、神は時間の瞬時の経過の中に現れたもうことを信じて、神はそうした瞬間の解釈であると確信したとしたならば、キリスト教教育は何ら意味なきものとして捨て去ってしまうだろう。人間にとって唯一の希望は、人間が絶望の極に立った時に神が彼に直接に働きかけて下さるということであり、また教育によって神を探し求めるということは、冒瀆的行為である、宣教は唯だ一つの希望であり、教育はすでに光を見たもののためのものであるということとなる。

さて、もしも私が、神は歴史の中の出来事を通して、また日々の生活を通して御自身を啓示されると信じるならば、そして神が他にかわりなきイエス・キリストとして私どもに来り給うたことを信じていたらば、キリスト教教育は、全能の神のいますところに導かれ、神のみ恵の系路として開かれたものであり、事実に解釈をそえての伝達であることになる。神に対する信仰または信頼の行為は決して単なる教育過程によって左右されるものではなく、むしろイエス・キリストとの交りを共にすることによって主を知ることができるのである。

もし我々が聖書を啓示の記録として見、人類の歴史というドラマの中にみられる神の大いなるみ業の説明として見るならば、啓示に基いた聖書的な信仰を教えるための基本を持つことになる。しかし聖書は常に教会の書であると同時に、生活の中に断えまなくいまし給う聖霊により、また聖書に録されてある啓示による教会生活を送るために、教会の交りにあずかることを通して聖書の真理を見出すのである。

三　説教と教えること

宣教と（ケリュグマ）と教える（ディダケー）との間には確かな根拠をもって区別される。聖書の時代において福音は異教の人々に対して宣べ伝えられ、その使信は単純であったが、新しい時代が来た、このことはイエス・キリストの生涯と死とその復活を通して起った。悔改めによる神の許しの与えられるためにキリストは再臨される、そのキリストを我々は教会において聖霊により知るのである。しかしこの使信は教会の中にいるものにも伝えられなければならない。特にイエス・キリストの物語りとその日々の生活のための教えを繰返して語り伝えなければならない。

一方教えることは回心させるためか、もっと深くこれを知り、もっと献身的なものとさせるためかのいずれにも必要であった。教えることとはいずれも、近代の教室においても、また現代の説教にも密接な関係があり、そうでなければならないものである。これがテモテへの第二の手紙の中に我々が見たものなのである。

初代教会は、すでに教えることは単なる知識の伝達に限ったものでないことを知っていた。子供たちは、「主の薫陶と訓戒とによっ

は楯の両面とも云えるものだからである。教師はいつも伝道者であり、伝道者は教師でなければならない。目ざすところは、人々をイエス・キリストにおける信仰に導くことで、これは聖書の救いの知恵を通してなしうることなのである。教師は聖霊の共同社会の中でその務めを有し、さらに求道者は、この交わりの中で信仰への道を見出すのである。

課　題

新約聖書における教会は教える教会であった。教職の中に教師が加えられており、教会の礼拝には必らず「使徒たちの教え」すなわち、特にイエスの御働きの目撃者としての証しという意味で、しかもこれは、ほとんどが教えによる宣教であった。それはどのような場合においても「折を得るも得ざるも常に励む」ための責任から逃がれることはできないのである。

一　教会における　キリスト教教育

マタイ　二八・一八―二〇
ヘブル　五・一二―一四
ヨハネ　四

復活の主は、「それ故に、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。（マタイ二八・一八―二〇）と命ぜられた。この大任は、教会の務めの中心としてその宣教事業と教育のプログラムとを導いて立っているものである。

教育ということは、学ぶ者たちの参加している一つの共同社会を反映するものであってその社会的グループの中にあって人は自分がどういう人間であり、世の中はどんなものかを知ることができる。そしてその人間的な相互関係を通じて、個人は一個の人格としてその能力を発揮する機会を与えられる。これは一般教育においても真理であって、この場合その問題と解決とは、教室、運動場、街頭、野外、さらにもっと近く家庭の生活の中で見出される。社会の対人関係を通して促進されているところの神の忍耐愛と贖罪愛は、社会生活の中の特別なキリスト教的なものである。霊的な成長は、学ぶ者を神の恵みによる自由の賜物に対して、信仰をもって応えられるようになるに従って起って来る。こうしたことは、決して真空な世界、または神を知らない共同社会の中では起らない。従って「教会」と呼ばれていたとしても、神の恵みが実際に経験されていく交りでなければ、こうしたことは起らないわけである。

これは現代の教会員に、ほとんど不可能なことを要求することになる。なぜなら、それは礼拝を共にしている会衆にうちとけない求道者、また私の問題は他の人になんら重要なものではない、あるいは、私に関係のないことを聞かされるとの考えに固まっているところの悔改めを必要とする罪人たちとの交りであるからである。従って重要なことは、聖霊の交りにあずかるものとなることであり、そこにおいて恵みのうちに成長し、そしてキリストによる信仰の働きによって福音の救いの真理を認識することである。

そこで学ぶ者、求道者の気持をキリスト者の社会に伝わるところのもの、またイエス・キリストについての知識に向けさせることである。問題は、こうした人々のために、彼らに関連あるものとして意味深いものとしての説明を与えたり知識を与えなくてはならない。すなわち、この歴史は自分の歴史であって神の民の継続しているこの歴史に自分もやはり関係しているのだということがわかるようになれば、自分に対する神の啓示の意味をわきまえるようになって来るわけである。

は教師たちの長であり、指導者のそのまた指導者であり、最終責任者でもある。牧師は決して教育の務めを手ばなしてはならないが、この奉仕の一部は、教師を教育して、彼らがその使命を全うできるようにすることである。さらにこの職務の一つは、全牧会区の教育的プログラムを指図することである。それは、力あるキリスト教教育の見地からも重要な教会生活を分ちあうことであるため、会員たちの教会生活の全般にわたって教育の内容を決定することである。教職は教会に対する心づかいを一手に握っていてその責任から離れることは出来ない。教職は決して信徒のそうした務めを奪うことをしてはならない。それは万人祭司であり、そして教会の奉仕の仕事は、すべての人が分担すべきであるから。

六　礼典と説教

Iコリント　一二・一三
Iコリント　一一・二〇

按手礼をうけた教職に特有の任務は、礼典と説教を司ることである。これについては、その地位とか制度ということにより、信徒と教職を区別することで、いろいろ意見の相違がある。教職は全教会に代ってこれを執行するが、イエス・キリストは頭となり主人としてバプテスマと主の聖餐も司どられる。

〃われらすべてが〃とパウロも云ったように〃一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである〃(Iコリント一二・一三)。これがすなわち、我々が御霊によって一つのからだ(教会)の一員となり、葡萄の樹に接枝され、キリストにつくものとされることなのである。神は、これによって、その人に対する彼の関係を宣言し、その子を御自身のものとなし、恵みによって、その子を交りの中に招じ入れるよう働き給うのである。そのしるしは与えられ、そして〃効力は我々の過ぎし日々をふりかえって見ると、信仰により働き続けている〃。

バプテスマについてのこの見方は、小児洗礼を信ずるものにも、また信じる者のバプテスマのいづれに対しても、共にあてはまることであるが、信じる者のバプテスマの場合にはバプテスマをうける前に、その決心に対して充分の知識をもっているかどうかについて確かめる手続がとられる。この場合、準備と献意ということに重点が置かれていて、それに従った教育が、その前後に用意される。小児洗礼を実施するものは、バプテスマの意味を明かにすることと、両親の責任という両方を明確にして、教育による教会のつとめに参加させることである。

しかしキリスト者である親は、その児がバプテスマを受けない場合に責任がある。献身式は(両親のでも小児のでも)子供たちの小さい時の教育の務めに両親を参加させるという機会を与えるのであって、それは親(名つけ親も)と教会員が小児の洗礼なり献身式においてその責任をとって、はじめて教育のプログラムが効果をもたらすものとなるからである。両親は、その子供の教育には格別な任務をもっており、それを果すためには教会員の協力を必要とするのである。それがために全家族を包含するところのプログラムが必要となって来るのである。

聖餐式は、はじめの頃より礼拝の主要なものであった。そしてこれにそってユダヤの会堂における礼拝に似た讃美の式があった。そして両者とも御言の説教がその中にあった。聖餐式の解釈については種々あるが、ほとんど、どの場合でも活ける主が主人役であるとなっている。そして充分な教育が聖餐にあずかる前にされてあるべきであるという点は、皆一致しており、ただ少数の教会だけが、これを教育的であると共に礼拝の経験として、部分的な参与を実験して来た。

説教はいつも礼拝の一部である。会衆は、期待をもって聴く責任を帯びている。それは

てエペソ五・四）育てられるべきものであり「教会の交りの中に包含されなくてはならないもの」（使徒二・三九、Iコリ七・一四）であり、彼らは「恵みのうちに育つ」べきものであった。子供たちの養育は、その両親の責任であるが、しかし皆に負わされたものであることは明らかになっていた。それは「一人の幼児をつまずかせるものは、大きなひき臼を首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる」（マタイ一八・六―一四）からである。

四　信徒

Ⅱペテロ　二・九
マルコ　一〇・四三

このテモテについて我々の読むところは、信徒と教職の両者にあてはまる。それは共に教会の教える務めを分担するものであるからだ。新約聖書には、プリスカ（使徒一八・二六）とフィベ（ロマ一六・一）のことについて言及されているように男も女も含まれている。「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である」（Ⅱペテロ二・九）。教会内にある人々の働きは〃ディアコニア〃（執事）の働きであって、これは、もともと食卓につかえる者の意味であったが、さらにこれは、「あなたがたの間で偉くなりたいと思うものは、仕える人となり……」（マルコ一〇・四三）とあるようになお一層広い分野を反映している。

信徒は、キリストの和解の務めの一部を受け持ち、そのため彼らは各種の奉仕に召されるのである。キリスト者は、教会の内外においてその信仰を証しなければならない。彼らは教会から世の中へと行き、その日常の生活への彼らの献身の誠をもうち込んで行く、彼らは、その生活のあらゆる面で教会の代表者でなければならない。

新約聖書に見られるように、このような信徒の働きに対する考え方は、今日の教会に大いに必要とされている。もし我々が、我々の日常の働き、仕事、娯楽の世界にその信仰の証し人であるとするならば、我々の背後に一つの共同社会の心を必要とするわけである。孤独な予言者ではなく、信ずる人々との共同社会の代表者、それを今日の世界は要求しているのである。そのために信ずる者同志は、互いにまた常にその経験を分ちあい、実証を評価してキリストのみ心と信ずるところに従って決断する道を拡げていかなけばならない（ピリピ二・五）。

教会の内部では信徒は教育の使命に等しく関係していかなければならない。共同社会の生活を共にすることにすることによって根本的なものが得られる。この共同社会では聖書的信仰が活かされ、教会の歴史の伝承が現実に即したものとなり、相互の信頼に基づいた真実な対話がかわされるようになる。こうした過程は、教育というものが継続的な経験であり、教育の使命は教職も信徒も等しく関係するものであればこそ、大人も子供も含まれるものなのである。

五　使徒職

使徒　一・八
Ⅱコリント　一一・二八

使徒には、復活の証人であった者が加えられており、はじめの一二人とマッテヤ、パウロ、および主の兄弟ヤコブ等である。彼らは「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果まで」イエスの証人となるわけであった（使徒一・八）。使徒と教会の継続する職務との関係については、議論はあるが、現在の問題に関しては緊密な関連はない。ただ権威と地位とをもち、按手された教職というものは、教会の発展途上のニードに応えてきた。

今日の教職は、各種の任務のなかに教会の教育的生活に対する責任をもっている。牧師

牧会区全域への

キリスト教教育計画

解説

　ペンテコステの日、或る者は使徒たちが酒に酔っていると皮肉った。これに対してペテロは「今は朝の九時である」からという理由で、彼らは酔っていのではないと確言した。それから彼はヨエル書から一カ所、詩篇から二カ所、三つの偉大なテキストによって、イエスがどのようにこれらの預言を全うされたかを示すために説教を組み立てた。約束のみ霊は現実に果され、老若、男女を問わず一様にすべての人々に注がれた。ヨエルの預言は、人々に殺されそして再び甦ったナザレの人の来ったことによって全うされた。これは実に「神が熟慮された上での目的」（モファット訳）の一部であった。ダビデは既に死んではいるが、メシヤは復活すべきことを知っていてこれに対して「私たちは皆その証人なのである。彼はダビデが預言していたように昇天された。これを聞いて人々は神が「主またキリスト」とせられたこの人を十字架にかけて殺したと責められた。

　この原始的な説教が実際にペテロ自身の言であったにせよ、又使徒行伝の著書の文書的な構造であったにしろこれは原始教会の信仰を反響している。そこにはキリストについて極めて発展された概念はなく、昇天したキリストはその聖霊を送られたということを知っていた。

　この説教に対する反響は殆どこれを描写することを不可能ならしめる、即ち三千名がバプテスマをうけたというのである。この数字は後世の伝説を反影しているかも知れないがこの出来事は今日の教会にとって緊密な関連がある。これらの人たちはペテロの言を聞いて「心をさされ」急所をつかれ（フィリップス訳）た。ペテロは彼らに悔改めて、イエスについての考えを改めるようにと告げた、彼らは彼の名によってバプテスマをうけることによってこれをなし得るわけであった。（ヨハネ四・一―三）

　バプテスマに続いて初代教会の四つの特徴が出来た、それは㈠使徒たちの教え、㈡使徒たちの交り、㈢パンをさき、㈣祈りをなした。これらのことはペテロの説教が新しかったように新しいことであった。それは彼らは新しく、また豊かな共同社会をもち、より深い食卓での交わりをもち、そして神殿における彼らの祈りは古いイスラエルとの連続性を示していた。会員たちは使徒たちの不思議な業を目撃して深い畏れに満たされていた。

　信じたものたちは「皆共にいた」（モファット訳）その持物を分ちあい、必要にせまら

神の啓示は、単に説教の優秀さによるものではなく、同じく聴くものの受ける心に関係するものだからである。教会に対する説教は、すでに福音をうけたものに対して宣べられるのであって、教会から外への説教は、まだ福音に接しないで、またはこれを受けいれていないものに対するものである。だが普通、説教は両者を兼ねて行われている。しかし伝達なくしては、何事も宣べられない。それがためにデイダケイでありケリュグマである。

七　教師とされた信徒

教会の教育的働きは、いわゆる「教会の隔離された世界」のうちに存在する「教師とされた信徒」の特種グループをそのうちに含めている。この人々は決して第三の教職ではなくて平信徒であり、そのためこの人たちは、この世とのつながりに止っていなければならない。これは教育家、音楽家、教会書記、会堂管理者、その他、いろいろの部類にあてはまる人であって、この人たちの職業的生活が教会の中でされ、特に重い責任がおわされている。この人々は職業的な訓練をうけ、その仕事についていることで牧師の働きをたすけるが、しかし同時に、彼らは信徒のうちの指導者である。

多くの国々で宗教の教師は、この部類に嘱する人たちであり、この人たちは学校と教会で従事しており、そのための特別な訓練をうけている。また他の国々では、教会員たちのキリスト教教育の主任者として、あるいは、またいくつかの教会が協力して一つの新しい指導者的な役割をも新しい職業が起ってきている。ここに我々はキリスト教教育のプログラムの発展の源を見ることができる。

八　教育の務め

すでに教会の会衆の生活全般が教育的なものであって、この生活に参与することによって、人は学ぶことを述べたが、教育はバプテスマ、聖餐、讃美の礼拝、そして説教を包含する。それは信徒の等しく関係するものであり、教師とされた信徒、教職の務めに関連するものである。それは、たとえそのことを知っていようがいまいが、すべてのもの皆が、お互いに間接的に教えているわけだからであり、それで多くの場合、直接に教えているからである。

教会の生活は聖書に基いており、この教会の書を通して、またこの教会を通して、私たちは神に出会うのである。私たちはこの世における神の贖罪のみ業と保持の御働きの長い歴史に参加することになる。私たちは教会の集りにおいても、また私たちの日常生活においても神の僕となり、あくまでも寛容な心でよく教え」（Ⅰテモテ四・二）るようにとの命をうけているのである。

ディスカッションのために

1　教育は、求道者の参加しているキリスト者たちの生活を、どのような意味をもって反影しているか？

2　地方教会の生活は、この世の世俗社会において教育の中心となる程に強力なものになり得るであろうか？

3　啓示についての考え方は、教育によってなされる影響はどうであろうか？

4　キリスト教教育のはじめられるのはいつか？

5　信徒の教育の奉仕と、按手をうけた教職の教育に対する務めとの間に、どのような区別を考えられるか？

6　(a)聖書の地位と(d)教育の務めとの認識に対してⅡテモテ三・一〇—四・五は、どのような助力を与えるか？

が、どの程度、これに関係する人たちの生活を変えつつあるか？

このような評価は、この働きに応呼する人たちの割合、又どうしてこの人たちがこれに参加しようとするのか、どういうことが彼らに起ったか、又これらの働きが世俗的な社会一般にどれ程の影響を及ぼしたかというような事柄についてせられる必要がある。

こうした教会員の反省は、やがて信徒指導者ということについて新しい見方を生ずるようになり、又より深い教会に対する忠誠心と、そしてもっと考えのある行動がこの新しい達見に伴ってくるであろうし、このグループからはもっと徹底した訓練を身につけようという少数の選ばれた人たちが現われ、指導的な地位に立って、有力な教師となる人たちが出て来るであろう。

牧会区の生活を更新するためにはこの外に多くの問題がある。例えば教職の能力、礼拝をもう一層定義あらしめること、牧会区全般の生活に対する教育的なプログラムの影響力等たくさんある。その教会の礼拝と交りのみならず、その宣教力の範囲も、牧会的な働きにも福音の主張の方面にも更新が必要とされる。又内部的なことばかりでなく、教会を取りまくこの世との関係がキリストの全人類に対する贖罪の光りに照らして見られなければならない。又単に一地方教会とその教派えの忠誠ということだけでなく、エキュメニカルな運動との関連において、正当な見界を持ってこれを見るべきである。

三　教える教会

「もし教育ということを一つのグループの生活の中で生長してゆく過程と考えるならば、これは四六時中、不断に行われるものであることはいうまでもなく明白なことである」とマージョリ・リヴスが書いている。これは教会生活には不可避な事実である。

そうなるとキリスト教教育の方策について教会員が関連し日曜日の教会学校のプログラムは教会全体の教育的影響力の一部となり、すべての組織、すべての活動すべての形式ばらない集会は、皆この会員の上に及キリスト教共同社会の影響力の一部なわけである。

そこでキリスト者同志、一緒の生活するために肝要な人間相互の関係ということのために一定の実施機関が必要となってくる。この事は多分に教会員に代って綜合的な教育プログラムに対する責任をもつキリスト教教育委員として奉仕する信徒との代表的なグループがこれに関連してくる。このこのようなプログラムは単純で、綜合的な、しかも柔軟性のある科別になっているべきで、科別ということは子供にとって重要であると同じく、大人の組にも重要である。そしてプログラムはその構想ということよりも、むしろ人間により多く関心をもつものであるべきである。

四　伝達と関係性

Ⅱコリント　六・一一－一三

伝達ということは何か伝えねばならぬことがあるという確信に始まる、この伝えることというのがイエス・キリストによる神の啓示についての福音である。しかしこのキリスト教の福音の力に圧倒されている時でも、そこに何か人的な出会いというものがなければその保証が何もないことになる。ただ本当の共同社会内においては語られたことには必ず反応があるもので、この場合の通意は啓示の充当ということである。

私たちは又共同社会は教育するものであることを強く記憶しておきたい。家族は共にどのような生活をしているか、その経験するところによってその子たちを教育する。学校はその生活する校風によって教育し、その道徳的内容によって教育する。共同生活のしるしはそのメンバーの総てに刷りこまれ、すべて聞くことも解釈もその環境の中でせられるの

れていた人々を助けるために必要なものを売った。彼らは単純な悦びにあふれたそして彼らは神を讃めたたえた。

こうした状景は理想化され、過分に単純化されたものであったが、如何にキリスト者たちが共に生活すべきかということを描いている。それは聖霊の賜物による日常の生活における意味を捕えて、現代の教会の会衆に対してけ各自の個人的な関係について一つの挑戦をかかげている。そしてキリスト教教育に関心をもつ人々に対して深淵なメッセージを与えるのである。

課題

キリスト教教育はどこで行われるか？私たちのキリスト教教育のプログラムは誰のために計画されるのか？形式からいえば教育は学校、家庭そして教会においてキリスト教教育は行われる。年令からいえばプログラムは学校、家庭、教会にいる子供たちに限られている。まず各個教会に中心をもって学校と家庭によって補われ、全年令のために計画されるものが牧会区全般へのプログラムである。

一 牧会区の真の任務

コロサイ 三・一六―一七
エペソ 五・一八―二〇

私たちはたとえどのように理想化して描写されていたとしても、初代教会には現代教会には見られない、はっきりした特長があったことを見た。これらの初代のキリスト者たちは活けるキリストの臨在を感じ、愛と信頼が最高の徒であった交わりの一員となり、その共同社会はみたまに満たされていると思っており、彼らの罪が赦されたことを憶え、その新しい信仰への証人として自ら任じて集団を組織していた。

これらの共同社会は今日の標準からすれば小さいもので、自然会員同志は皆よく知り合うことも出来た。従って又広大な地域にわたるような巨大な教区というようなものもなかったし、又大説教者を聴くために数千の人々を集める教区というものもなかった。大会堂の維持のための心配も、募金の苦労もなかった。その組織は近代の標準から見れば素朴であるが、よく常に働いていた。教会というものは世俗的な標準で判断すべきものでないとして、異教の人々の意見などは一向重きをなしていなかったのであった。とはいえ、使徒行伝によればこの人々は総ての人たちから尊敬されていたと書かれている。（二・四七）

我らに課せられている問題は現代のロンドンにしろ、東京にしろ、人種や年令の差別なさ、本当のキリスト者の交りが、社会的なグループを纏めて行くためとか、建物の維持や、その財産を守るためのこの世的な心づかいを超越して、本当の教会区の生活がその働きをつづけて行けるようなものであり得るかどうかということである。一体教会というものは、あってもなくてもよいような日曜の行事であるのか、それともこの世におけるキリストの体なのであろうか？

二 教会生活の更新

Ⅱコリント 五・一六―二一、八・一七
ロマ 一二・一―二

私たちは教会の教育の務めについて考える前に、まず教会員たちに対し、その奉仕の務めについて理解するように、しなければならない。ジョン・ヒウス博士は、このことに関し三つの質問をこころみている。

㈠ この牧会区内での真の宗教的な事業は何であるか？

㈡ この全牧会区にわたってされて来たすべてのことは、その真の宗教的任務のために進めさせなければならないが、どのようにしたらよいであろうか？

㈢ 私たちが現在やっているすべてのこと

ここに得るわけである。ここにおいて、人格性を失わせられたり、差別され、しいたげられたり、又は彼らのために彼らの問題に打ち克つ人々に対する自分の責任を見出す。

六　聡明な行動

牧会区全般にわたる教育計画はその全環境の中にある全人を包含するということは明かなことである。「主は一つ、信仰は一つ、バプテズマは一つ……しかしキリストから賜わる賜物のはかりに従って、私たち一人一人に、恵みが与えられている」（エペソ四・五—七）或るものは一つの仕事に、他のものは他の務めへと召されているが、皆平等にキリストの体の肢なのである。教会はその会員全体のために教育を備える必要があるのはこのためである。無智はゆるされない。知識はキリスト者となるためということよりもむしろキリスト者として行動する資格のためである。

教会の罪は極めて複雑な社会的変革をなしているこの世に於いて、教会員たちが知性をもって行動するために必要な、そうした知識を与えず、又持ちあわせていないということである。教会は厖大な資源をもちながら、どうして労働階級から信者をこうも多く失ったか？なぜ相対的な道徳的廃頽を止めることが出来なかったか？なぜその会員たちのある者たちのために共産主義と代るべき充分なものを見付けてやることが出来なかったか？なぜ今日の国家主義の興隆に備えることをしなかったか？ということである。また今日行われているような当然来るべき大変革を予知してこれに備えることが出来なかったということも同様にその責任を問われるわけである。

では教会の教会区全般にわたる教育計画はどういうものかを見てみよう。教会には少くも六つの働きがある、そして、その一つ一つの中に各年令層にわたる教育的な概念があるのである。

一、礼拝　私たちは礼拝を面して礼拝することを学ぶので、その話をきいて学ぶのではない。礼拝に参加して聖なる神のみ前にあるということのすばらしさ、畏れを知るのであって、共に共同社会の中で崇敬、告白、祈願、代禱、感謝を捧げ、主の赦免と祝福を身におぼえるようになるのはこの共同社会における神との関係であって、これは神のみ前においての共同社会の団欒の行為なのである。これは教会の教育計画の中心であって、教会生活において一緒に行われる他の各種の働きに及ぶものである。族を一緒にして、理想的にいったら各階級、各人種を貫いて皆な一緒になるようにする。これによって神が私たちを立たしめ、新しい方向へと向わしめる手段であり、そしてこれは私たちの生活している世界に対しての新しい決意、新しい献意への機会でもあるのである。

二、交り　教会生活の性格は他の諸種の働きと重なりあって、その交りによって表現される。ここでお互いの個人的な関係において神の贖罪愛の通じる道は、常に開かれ、私たちはお互いに仕えあう。

この交りは、しばしば小さいグループによって表現されるばかりでなく、又以下のようなことを試験される必要がある、即ちこの小グループは誰でもそのおよぼす範囲の人たちを神の贖罪愛へと引きつけているかどうかその人の愛と受け容れる気持ちに対する基本的なニードにこたえているか、法則と信頼感に対し、生長する自由に対し、このグループの生活に働く神の力強いお働きの実感というものに対するその人のニードに応えているかどうか？

三、外国伝道　教会の内的生活の有効性はその宣教的活動に関係する。福音というものは決して個人的な信仰とか、偏狭な教会内だけの諸事業とかいうだけの容器の中に収めておけるものではない。これは常に外部の人たちと分ちあうべきものである。教会の宣教は教会の内外をとわず、すべてその手の届く限り

である。

キリスト生活の鍵となる語は関係性を語るものである。信仰は私たちの神との関係性を語り、愛は、人間同志の関係性であり、そして特に神と私たち自身との関係性である。和解と赦しとは個人的関係性の回復である。これらは単なる人間的関係性以上のものである、それは人間の究極的関係性というものはその造り主として人間の上に臨み給もう神と関係性であるからである。人間をして人間らしくするものはこの二重の関係性であって、これが受肉ということが必要であったわけで人間の信仰は「神はキリストにおいて世をこ自分に和解させ」(Ⅱコリ五・一九) られた歴史的できごとに帰省するからである。

一度この関係性が正しくされればこの関係性を明かにするようにことばが用いられ得るのである。宗教的なことばはこれを学ぶものが全面的な献意に導くものが何であるか見分けられるために用いられる。「神を見た者はまだ一人もない」(ヨハネ一・一八)、しかも唯神の健在を悟ることによってのみ信仰の応答を来らせることがあり得るのである。宗教的言語は人間相互の関係性の上につくられて、表面に見えることよりも深い何物かをもたらすのである。

教師が「イエスさまは生きていたの?」と尋ねられた場合、これに対する答は写実的言語を用いてされねばならないが、もし質問が「イエスさまは誰?」というのであれば、この場合の答えは法的単純的なもので、ペテロがペンテコステにおいてすばらしい模範を示している。それは学ぶ者がこれによって導かれることをねがっているからである。

五　教会区と世界

アモス　二・六―一六
ミカ　六・六―八
マタイ　二二・一五―二二

この世が今や急激な社会的変革をなしとげて行く時に教会は遙かにおくれているように見える事がしばしばある。ある意味では教会はついに産業革命に追いつきかねてしまったともいえる。自分たちの共同社会の中にある。人種問題を未だに解決していないで、社会的にも政治的にも僅かにその表面をひっかいたに過ぎないし、抬頭しつつある国家主義民族主義の要求に応えるような宣教的方策をとり得ないでいる。また東独における青年問の献身的行為その他の共産主義の圧迫に対してどうしてよいか困っている。こうした社会的変革においてその唯中から預言者が立ち上ってきたのを教会は見て来た。E・R・ウィクハム、マルチン・ルター・キング、トレヴァー・ハドルトン、ダニエル・T・ナイルズ、オットー・デベリウス、その他多くの人たちが道を開いてくれたが、教会はこれについて行っていない。

私は信ずる、神は私たちが社会に行動するように召しておられる。徒らに理想的な事情が出来るのを待っていないで、何でも利用出来るもの、政治的にも、経験的な組織なり運動なりを利用して行動するように召しておられる。神の勝利の確かさは私たちを空しい幻想や、偽りの希望などから解放してくれる。同時にたとえどんな境遇に陥ろうとも、私たちの努力は神がこの世に持っておられる御目的に意義を持つに違いない……個人道徳の問題や、家族の問題、経済生活の目標、人種、国際的協力等の問題は、お互いの関連を離してしまったら回答は得られない」ことを。

キリスト教教育の出発点はこの点に見られる。すなわち、生徒はこの世から教会に来る、そしてこの世に帰って行く。彼らは急激に変革しつつある社会に生活し、ここでキリストの兵士として、僕として意味のある生活をしなければならない。彼らは教会の中に生活しているのではない。教会においてその理想とするものを見出すならば、彼らが教会に持ち込んで来る種々の経験を評価する標準を

児童説教

九月のこよみ

夏休みが終って、九月の新学期がはじまる。子供たちが新しい気持になって学校の門をくぐり、さわやかな秋の気候に胸をふくらませて勉強をはじめる。教会学校でも、これからクリスマスまでは、一番充実した季節として、礼拝に、分級に、野外活動に気をくばらなければならない。昔は、九月に振起日があって、生徒募集をしたものだが、そうしたいきごみを礼拝の中に生かしていきたい。

九月から十月にかけて、三位一体期節は、行事としては取りあげるようなものはないが、聖書のテキストは、内容的には、もり上りの時期である。聖書のメッセージを十分に伝えるようにしたい。

九月には、二つの記念日があるので、何かの形でおぼえるのもよいのではあるまいか。一つは九月二一日の福音書記者使徒聖マタイの日である。使徒マタイは新約聖書の最初の福音書に出てくる名前であるからもっとも有名な弟子の一人であろう。

もう一つは、九月二九日の聖ミカエルとすべての天使の日である。わが国の教会では、天使はクリスマスページェントにしか出てこないが、欧米では天使は特に子供たちにとって、まことに身近に感じられているようだ。私たちは、もう少し天使のことを考えてみよう。

九月三日

神に感謝したサマリヤ人

聖書　そのうちのひとりは、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。

ルカ一七・一五―一六

わたしたちは人から親切にされたり、贈物をもらったりしたら、必ず「有難うございました」とお礼を言います。又神様からお恵みを受けた時、感謝いたします。もしこんな時お礼も言わず感謝もしない人は普通の人間とは言えません。パウロ先生は「すべての事について感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである」（エテサロニケ五・一八）と教えています。

イエスさまが、ある村で十人のらい病人をいやされた事がありました。その当時らい病人は呪われた者と見なされていたので、普通の人としてのつき合いができず、世捨人のようなみじめな生活をしていました。イエスさまは彼らをあわれんでらい病をなおしてやりました。彼らはいやされて、どんなに喜んだでしょう。ところがお礼を言いに来た人は、十人の中のたった一人だけだったのです。しかもサマリヤ人でした。彼は大声で神をほめたたえながらイエスさまの所へ帰って来ました。そして主の足もとにひれ伏して感謝の言葉をのべました。他の九人はお礼も言わず何処かへ行ってしまったのです。何となさけない人ではありませんか。サマリヤ人はユダヤ人と仲が悪くいつも反目していました。それだけにユダヤ人のイエスさまから助けられたサマリヤ人は感謝の思いが深かったのです。

の人たちにおよばなければならないもので、新しく生れた者も、来なくなったもの、無関心なもの、敵にも、また未だ福音を聞いたことのないものにもゆきわたらなければならないのである。

外国伝道の教育は全牧会区教育計画に重要な意義を持たねばならぬものである。

四、牧会的配慮　イエス御自身のお働きから私たちは「盲人は見え、耳しいは聞え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされる」（ルカ七・二二）という約束を持っている。刑務所伝道、病床伝道、慈善事業、そして牧会的配配慮はいつも教会の働きの一部であった。

今日の牧師たちはその牧会的配慮については非常に上手になって来ているが、その大部分は実は信徒によって負われねばならぬことである。彼らは良きサマリヤ人の人間愛を以って必要にせまられている人たちを顧みることの出来る人たちである。こうした神の癒しの愛を通じる信徒による働きは都会の垣の外に及び得るものである。

五、エキュメニカルな活動　教会の働きの境界線というものは国境を越え、教派の境えを越えている。この国家主義や、教派主義には二重の危険が胎んでいるが、教会の証しは全体としてその特徴のある信条や、様式等を破ることなくして、世界教会協議会を通して克服し得るものである。外国宣教運動からテムプル大主教が「我らの時代における偉大なる新事実」と呼んだ世界的な交りが出来た。

六、教えること　全教会区を包含する教育計画は教会区の他のすべての活動と働きを包含するもので、その会員の総てを包容するものであるが、同時に教育する特種のプログラムがある。それは、説教、研究会、教会学校、協議会、教会出版部、書籍などである。

教会は神の御こころをその教会員に又教会の外部の人々に対して翻訳してやろうとする。神はその造られた世界に対して働きかけておられ、教会はその審判の下に置かれている。しかし教会は逆に神のみこころを求め、キリスト教が生活のあらゆる面にあてはめられるものであることを教える、それは皆、神の摂理の下にあることであるからである。人生の根本問題は福音において、福音を通して答えられ、神学は、この福音の答えを正確に意味深く、さらに適切性をもっ形において示そうとするものなのである。

ディスカッションのために

一、教会生活について新約聖書に描出されているものは二〇世紀においてこれを目標とするにはふさわしいものだろうか？

二、つぎの事項はあなたの牧会区においてはどうか？

イ、この教区の真の宗教的な仕事は何か？

ロ、この全牧会区においてせられて来た総てのことが、どうしたらこの真の宗教的な働きを進められることになろうか？

ハ、私たちの存在している一切のことが、どの程度に人々の生活を改めることに関係づけられるか？

三、言の意味と、その言が用いられている共同社会との間にどのような関係を見られるか？

四、「世から教会に来て、又世に帰る」ということについて求道者のために論ずること。その事がこの世に対する教会の責任について何を語っているか？

五、それぞれの異っている文化の中にある教会はその任務について教会の六つの働きから如何にあてはめられるか？

六、全牧会区の教育計画を実施するために如何なる変更を施策方針に必要とするか？

七、「この曲った時代から救われよ」（使徒二・四〇）というペテロの叫びは現代においてどのように当てはめられるであろうか？

で明君は考えた末、お母さんがすぐ見つけてくれるような所に、一通の手紙を書きました。そこには掃除二〇円、お使い一五円、窓ふき一〇円等の表が書かれてありました。それは明君のお小遣い請求書でした。翌朝、明君が目を覚ますと、お母さんからの手紙が枕の下に置いてありました。明君は、いそいで中を読みました。見ると明君のズボンを破いた時、病気の時、お八つの時、お食事の時、などありましたが、その他は何も書いてないのです。つまり何もお母さんは要求していませんでした。明君はこれを見て何を感じたでしょう。君たちは何を考えますか。私たちは何かを選ばなければならない時、自分の心をなにに傾け、どちらを選ぶべきでしょうか。そして私たちは生きる事のためにどの道を選んだらよいでしょう。

リチャード・メリット

――九月一七日――

イエスと共に

聖書　**「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。すると死人が起き上がって、物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった**　**ルカ七・一四、一五**

カペナウムから二五哩位はなれたナインと言う町で驚くべき出来事が起った。たった一人の子供を亡くした孤独の母親が悲しみで目を泣きはらし葬式を行わんとしていた。大ぜいの町の人も母親と共に悲しみの中に葬式の場に集っていた。主イエスはその光景をご覧になって、深い同情をおこされ、正に運ばれようとしている寝棺に近より、声をかけられると、死んでいた子供が生きかえり、母親も人々も非常に驚いたが、やがて喜びをもって他の人々にその事実をしらせて、神の業をほめたたえたのである。皆様はこの様な出来事を聞いてどう思われますか。恐らく不思議なことだと思われるでしょう。たしかに不思議なことです。信じにくいことです。

世の中には私共の知らないことや、信じにくいことがしばしば起ります。それでもやがて、大きくなると、ああそうだったのかと分ってくるものです。私共の住んでいる地球はボールのような丸い球で、太陽のまわりをぐるぐる回っているのだよ、だから夜になると私共は地球の上に立ってぶらさがっているのだ（ボールの下方に立っていることを示す）と言えば、皆はそんな馬鹿なことがあるか、人間は落ちてしまうではないかと笑われるでしょうが、実際はそうなので、段々大きくなってきて、地球には引力があるから落ちないのだと分ってくるのです。今日の聖書のお話しでも死んだ人が生きかえるものかと思われますが、私共が成長して神様はどんなことでもすることが出来る方だと分ってくれば、少しも不思議なことではないのです。神様はすばらしい力をもった方です。アフリカの原始林での出来ごとですが、こんなことが起りました。「アッ痛くない、痛くない」と驚きの声がひびきました。その声の主は、いきなり両手をのばしてベッドの傍に立っていた医者の手を握りしめました。「先生、私はどうしたんでしょう。死なかったのですか。」「死んでいませんよ。痛いところは、あなたが眠っている間に切りとってしまいました。あなたは生き返ったのですよ。」「生き返った、私が?」と不思議そうにあたりを見回していた病人は忽ちはげしい歓びにおそわれ、「生き返った、生き返った。私は死ななかったのだ」とさけんだのです。これは、毒蛇にかまれて死ぬのだと信じていた土人が、シュバイツアー博士の前に運びこまれて、手術が終ったときの光景でした。この土人は蛇にかまれてもうすぐ死ぬのだと思っていましたが、シュバイツアー博士を信じて、彼にすべてを任せたので、こ

Hさんと言う信仰のあつい方がありました。戦前朝鮮で色々な事業をされてかなり成功した人でした。しかし終戦ですべてを失いその上奥さんもなくなられました。二人の女の子とも別れ別れになって日本に引揚げられました。その後もパン屋をやったり、山の中の開拓村へ入ったりしてずい分苦労されました。そのパン屋の家も火災にあいました。数年前二人の娘さんも白血病でなくなりました。この二〇年間は苦労の連続でした。しかしHさんはどんな苦しい事にも悲しい事にも負けませんでした。不平も不満も言いませんでした。ある時、Hさんが教会で自分の半生の経験を証しされました。その時のHさんの言を忘れることは出来ません。「わたしたちは苦しい時は神さまにお祈りをしましょう。けれども恵まれている時は神さまに感謝する事を忘れてはならないと思います」Hさんは現在非常に恵まれた生活をしています。

恵みをうけた時はもちろん、不幸な時も不運な時もわたしたちはたえず感謝するような人になりたいものです。信仰はむずかしい知識をもつ事でも行をする事でもありません。日々の生活の中に感謝の心をもつ事から始まるのです。

藤本　陽一

——九月一〇日——

君はどちらの道を選びますか

聖書　**だれも二人の主人に兼ね仕えることは出来ない。一方を憎んで他方を愛し、或いは一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることは出来ない。**

マタイ六・二四

「どちらを選ぶか」ということを考えてみましょう。例をあげて説明すると、例えば、お母様が病気の時、ちょうど友達が野球を誘いに来たとします。君だったらどうするかな。看病しますかそれとも野球にいきますか。他の例を採ってみましょう。夏休みに入って宿題が出ました。が健ちゃんは、毎夜テレビでプロレスや野球を見ると言っています。宿題を怠ってまで君達はテレビにかじりついていないかな。もう一つ例を出してみましょう。朝一番に学校についたところ、友達がうっかり忘れていった模型のピストルが机の中にあるのをみつけました。君だったらどうする。人のものは、本当はことわってから使わしてもらうのが本当なのですが、友達が来るまで使ってそっと机の中に入れておくかな？友達が来るまで使わないでいる勇気があるかな？

これからも毎日、これら似たような問題にぶつかるはずです。こうした時、自分でたやすく解決できると考える人がいるでしょうか。これは大変にむずかしい事です。ではこのような時、私たちは「何を考える事が大切か」を私と一緒に考えてみましょう。さきほどの例の看病することと野球をすることを一度にしたくてもできませんね。どちらかを選ばなければならないのですが、私たちは何に従って、どちらを選ぶのが本当でしょうか考えてみましょう。

私たちの中には、自分の事ばかりを考える心と、他の人のことも良く考える心と二つあります。がだれでも、必ずどちらかの心の方が強くなります。マタイ伝にこういう事が書かれています。「私たちは、二人の主人、つまり心を誘う異った力に一度に従うことは出来ません。その理由は、一つの方を重要に考え、もう一つの方を軽く見るからです。つまり私たちは、一度に自分の利益と他人の利益をいつも一緒には考えられない」という意味です。

明君はミットが欲しくてたまりません。買いたいのですが、今もっているお小遣では、とてもたりない程ミットは高いのです。そこ

礼拝説教



三位一体後第一四主日

神への感謝

九月三日

主日の趣旨　前主日即ち、三位一体後第一三主日から、三位一体節の後半に入ったわけである。後半の主題は「キリスト者の品性」である。そもそもキリスト者は何を目指して進むべきであろうか、キリスト者の真実の歓喜とは何か、キリスト者の遭遇する苦難の意義とこれを克服する道は如何。要するに「キリスト者は如何にあるべきか」について学ぶのである。

まず最初の三つの主日においては「正しく仕え奉る」者とせられんことを祈り、その道について学ぶのである。

前主日において学んだことは、神を愛し、神を愛する心で隣人を愛することこそが、神に仕える道であることを学んだのである。

本主日においては、聖書の[illegible]ぶのである。

主題　**栄光を神に帰する**

福音書　**ルカ　一七・一一―一九**
使徒書　**ガラテヤ　五・一六―二四**
旧　約　**ハガイ　一・三―一三**

祈り　とこしえにいます全能の神よ、我らに信仰と望みと愛とを増し加え、また主の約したまえるものを得んがために、主の命じたもうところを愛せしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　　　　アーメン

説　教

人間が愛し合って生きることが出来れば、我々の世界における殆どすべての問題は解決するであろうと云うことは、比較的わかり易いことがらなのである。

問題はどうすれば人間が愛し合えるようになるかと云うことなのである。骨の髄まで自己中心であり、自分を愛することに汲々としている我々がどうして、他人を愛することが出来ようか、愛するとは生命を棄てること、他人のために自己を棄てることだと教えられている。

いかに神の御命令とは言いながら、自分を棄ててしまって、どこに生き甲斐を見出すことが出来ようか、「生命あってのものだね」自分を大切にしないで、なんで此の世に生きる甲斐があろうか。と

のように生き返ったのです。
　神様はこのシュバイツアー博士よりも、すばらしい方です。私共が心のそこから、イエス様、あなたは神の子です。どんなことでもすることのできる方ですと言って近づいて行くとき、いろいろな困難なことが、解決されて行くのです。若者よ、さあ、起きなさいと言うことはは、皆さんイエス様と一緒に行きましょう。そうすれば悲しいことも苦しいこともありませんと言うことと同じことです。

柏木　信隆

九月二四日

主の日について

聖書　汝ら召されたる召に適いて歩み、事ごとに謙遜と柔和と寛容とを用い、愛をもて互いに忍び、平和の繫のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ
エペソ四・一

　「主の日」というのは、主の甦りの日として、主の弟子たちが毎日曜日を記念して感謝とさんびの礼拝をささげたことから今日に至るまで守り続けている日なのです。それまでは土曜日を安息日・聖なる日としてユダヤでは永いこと守って来たのですが、弟子たちによって、主の甦りの日を記念するために日曜日を聖なる日に改めてしまいました。もともと安息日を守る主旨は、神が天と地と海と其の中のすべてのものを造り給うたことをおぼえて、自分たちもまた神に造られ、神の守護のうちにあるべきものとして、神と絶えず交わり保っていくことを願うための聖日であったのですが、その主旨がズレて、一切の労働を禁止することに重点がおかれるようになってしまいました。
　「主の日」も、安息日も、もとの意味からすれば、即ち神に造られ、神に生命を与えられたことを感謝する点においては同様なものであるともいえますが、しかし「主の日」というときには、主イエスの十字架の死によって、人々の罪の罰から救われ、主の甦りによって永遠の生命にあずかることができる道がひらかれたという新しい全く別な意味により守られる日として、安息日と区別されます。
　そこで「主の日」には、古くから教会では聖なる感謝の祭として聖餐式が守られてきました。ちょうど過越の祭に種なしのパンや、ぶどう酒が用いられたのが、エジプト脱出における困難を再現しつつ現在の状態を感謝し、明日の生活への心の準備をしたように、聖餐式の礼拝は、人を罪の罰から救出するための大いなる犠牲を再現して、救われた者の感謝を表わし、主の甦りを信じて希望をいだき、かかる恵みを賜いし神をさんびして、神との交わりのうちにあると共に、すべての兄弟たちと主に在る聖い交わりと一致を保とうとするものです。
　ですから、こういう親しい交わりと一致の主日礼拝が、或る一部の人々だけのものに終ってはならないのは当然です。主イエスは「わたしには、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう」といわれましたが、現在わたしたちの教会に来ない多勢の友だちがみんな教会にきて、神の子たちの親しい交わりと一致によって神をさんびすることができるようにならなければなりません。
　それなのに、もし私たちが高慢であったり、偉そうにしたりして友だちの過ちを裁いたり、赦さなかったりすれば、どうして主にある交わりをそうした人々と保っていくことができるでしょうか。私たちも神さまに赦されなければならないものだから、過ちをした人々に対して、もっと寛大にならなければなりません。

堀江　光児

福音書　マタイ　六・二四—三四
使徒書　ガラテヤ　五・二五—六・一〇
旧　約　列王記上　三・五—一四

祈り　主よ、絶えざるあわれみをもって公会を守りたまえ。人は弱きが故に、主によらざれば倒るるのほかなし。願わくはすべて害あるものを防ぎ、益あるものを与えて、常に救いの道に導きたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

神の義と神の愛、審判主なる神と救世主なる神とは一見相容れないもの、矛盾するものの如くに考えられる。しかし聖書に基いて深く想をはするとき、この両者の間に全き調和がある事を悟らしめられるのである。

「汝、我のほか何ものをも神とするなかれ」との十戒の冒頭の戒めは、見方によっては、ねたむ神が、あだし神への転心を警戒してのおことばともとれるであろう。しかし、更に深くこの戒めに思いを致すならば、推り難き神の御慈愛の発露であることを知るのである。

本来、信仰は純一なものでなければ生命のある信仰とは言い得ない。それは似て非なるものと云わねばならない。

「だれも二人の主人に兼ね仕えることはできない」と主は仰せられた。

更にヤコブの手紙には「疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は二心の者であって、そのすべての行動に安定がない」と教えられている。

信仰は純一であると同時に誠実なものでなければならない。「アーメン」と言うことばが意味するように、澄み切った、まじりけのない、しかも神を絶対者とする傾倒的信仰こそが、まことの信仰と呼ばるべきものである。

神はこのような信仰を、御自身のためにではなく我らの救いの成就されんが為にこそ求め給うのである。もちろん、我らがこのような信仰をもって神に応えることは神御自身の大きな喜びである、しかしその喜びは神御自身の満足と云うよりはむしろ、我らが滅亡をまぬかれたことに対する喜びである。

真実に子を愛する親は、自分の老後のことや、自分の対世間的名誉のためにではなく、真に子供自身の幸福のためにこそ、子供の健康と幸せを祈るのである。

われらは神の厳しい戒の中にも、神の深い御慈愛を思わねばならない。

主イエスは、このことを厳しい戒としてではなく、空の鳥や野の草花の自然の営みに例を引いて語られた。

「空の鳥を見よ、まかず、刈らず、倉に収めず、しかるに汝らの天の父はこれを養い給う」「野のゆりはいかにして育つかを思え、労せず紡がざるなり。…今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装いたまえばまして汝らをや、ああ信仰うすき者よ」

空の鳥とわれわれ人間とはわけがちがうと云う前に、空の鳥も人間も、神に創造られたことにおいて同じであり、神に支えられて在ることにおいても同じであることを知らねばならない。

誰でもが真剣に考えるのである。

しかし、理屈をひとまず置いて現実に目を転じて見なければならない。重態に陥った愛児を見守っている母の心はどうであろうか、「神よ私の寿命を代り」と云うことが許されるなら、たとえ一日でも愛児に代ってこの病苦を引きうけ度い。代って死ねるものなら私が愛児に代って死んでやりたい。」これこそ偽りのない親の真実ではないであろうか。

昔から心中は日本の名物のようである。恋に身をこがして死んで行った男女が如何に多いことであろう。

愛とは不可思議なものである。何よりも大切であるはずの自分自身を、愛のゆえに犠牲とし、むしろ己れを棄てることを無上の喜びとするのである。

親子には血のつながりがある、恋愛には愛欲の匂いがする。しかしここに「聖なる愛」とでも云うべきものがある。

二〇世紀の聖徒と呼ばれるシュヴァイツァー博士を見るがよい。日本救癩の先駆者ハンナ・リデル女史を見るがよい。否、必ずしもこのような有名人だけを見る必要がない、主イエスの名によって如何に多くの愛の業が全地に行われていることであろうか。

骨の髄まで自己中心であった筈の人間に何故このようなことが出来るのだろうか。

曰く「御霊の実は愛」（ガラテヤ五・二二）である、と。

神の御霊によって歩むようになるときに、その人の業と言うよりは、その人のうちに宿り給う御霊の働きの果実としての愛の業が展開されるのである。使徒行伝が聖霊行伝であるように、シュヴァイツァーの伝記はアフリカにおける聖霊行伝である。

本日の福音書には、「神に栄光を帰するために帰って来たサマリヤ人」の物語が記されている。

神に創造られ、神に育くまれ、神に支えられて生きていても、神を知らず、神に感謝することを知らずに生きている者が多い。しかしこの神を知り、神の限りなき御恵愛の御子の降誕となり、十字架の死に及んだことを知るときに、われわれの感謝感恩のまことは「神に栄光を帰する」生活へのひたむきな志望となってあらわれるのである。

信仰も、希望も、愛も、所詮は神よりの恩寵の賜物である。

三位一体後第一五主日　九月十日

どちらを選ぶか

主日の趣旨　「正しく仕え奉る」第三の道は、純真誠実なる信仰を唯一の神にささげつくすことである。唯一神に対する信仰の節操はその昔、十戒の冒頭において既に強調されているところであるが、同時にこのことは聖書全体を貫いている精神でもある。

本日の使徒書では、キリストの十字架に帰一しようとするパウロの信仰的態度が示され、福音書においては我々は神か富か、神の国かこの世か二者選一を迫られているのであり、神への絶対的な純一な信仰、信頼にこそ、主に在るまことの平安が与えられることが教えられている。

主題　**純一なる信仰**

しかし　このありふれた、当り前の事が一旦、我らの身辺に及んだ時、我々は驚天動地の出来事として我を失うのである。

偉人も英雄も、これに打克つことは出来ない。パウロはこれを「最終の敵なる死」と呼んでいる。

正しく死は人生最終の、そして最大の敵である。それは人間苦の最たるものと言うべきであろう。

しかも、我々の生は実に、常に死に直面している生なのである。死は何時われわれの面前に踊り出てくるか全く計り知ることが出来ないのである。

このように我々の生が常に死に直面しているものである以上、死を知らずして生を論ずることは出来ないのである。孔子は「われ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」と言ったと云う。然しむしろこれは逆であって死を知らずして生を知ることは出来ないであろう。

されば、我らは如何にして死を知り得ようか。我々は正直のところ、自分の人生の始めを知らず、そして終りをも知り得ないのである。われわれは物心ついた時フト此の世に存在している自分に気付いたにすぎないのである。何処から来て何処へ行くのか、自分自身の人生の終りの時を知らず、死後果して何が私を待っているのかをも知ることは出来ないのである。

主はヨハネへの黙示を通して「我は始めなり終りなり」と仰せられた。まことに主こそ一切の始めであり終りであり給う。我らは主によらずして自己の生の始め（生の意義）を知り得ず、生の終り（死の意義）と、死の彼方に何があるかを知り得ないのである。

主は近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので「若者よ、さあ起きなさい」と言われた。

この福音書の記述は正しく、生死を司り給う主の権威を示すものにほかならない。

ヨブは世につける一切のものを失った時、「主与え、主取り給うなり、主の御名は讃むべきかな」と言ったが、主が与え給うたのは息子や娘や、家や家畜や財産だけではなく、自分自身が本来、主のものなのであり、主に属するものなのである。

この信仰に生きるようになった時パウロの如く「最早われ生くるにあらず、キリストわがうちにありて生くるなり」と言い得るのであり「我生くるも主の為に生き、死ぬるも又主のために死す」と言うに至るのである。

生も死も主の御手にある事を確信し、主の贖いの恵みによって神の子、天国の嗣とされていることを確信するようになった時、われわれの生は死を超えた確かさをもつに至るのである。

このようにして我々が人生最大の敵を克服し、パウロと共に「死はわが僕である」と言いうるようになったならば、人生における一切の苦難はわが身を清くし、わが心を強くするための尊き試練として甘受し得るに至るであろう。

三位一体後第一七主日　九月二四日

主の日について

主日の趣旨　キリスト者の品性に欠くことの出来ないものは謙遜の徳である。三位一体後第十一主日にも謙遜について学んだがそれは神の前における謙遜であった。本主日は対人関係における謙遜の重要性について学ぶのである。

むろん、空の鳥も安閑として徒食している訳ではない、小鳥を飼ったことのある人は知っているように小鳥程えさを切らすことの出来ないものはない。半日えさをやるのを怠ったら完全に死んでしまうのである。このことは、のどかに見える小鳥の生活にも絶え間ない勤労があると云うことである。

冬は枯木のように見えている樹木も、その幹や枝や根の内部では、たゆまない春への準備がなされていることを知らねばならない。

今日の福音書は無為、徒食、怠を小鳥や草花に学べと云うのではない。むしろ空の鳥や野の花の如く、目的のために忠実であるならば、神は鳥や草花にまさってわれらを支え守り養い給うであろう。

われらは神の養護を信頼し、神の国と神の義とを、ひたすらに求めなければならないことを教えているのである。

人間としての生きる目的を知らずに、生きる手段（衣食住）にのみ没頭している現在の人間生活への警告であると共に、このような世俗の風潮に無縁ではあり得ないキリスト者お互いにとって日々の教訓である。

三位一体後第十六主日

九月十七日

困難について

主日の趣旨　人間苦の波浪は容赦なく基督者の生活にも押しよせて来る。否むしろ基督者は、より多くの苦難に遭遇するものと思わねばならない。主は「己が十字架を負うて私に従って来なさい」と仰せられた。しかし我らには天来の能力があり、希望がある。神と偕に歩む人生にとって苦難は栄光への一里塚である。

主題　**栄光への一里塚**

福音書　ルカ　七・一一—一七
使徒書　エペソ　三・一三—二一
旧　約　詩篇　四三・一—一七

祈り　主よ、絶えざるあわれみをもって公会を清め、すべての害を防ぎたまえ。公会はただ主の助けによりて安全なるがゆえに、恵みをもって常にこれを守りたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

ナザレの東南五哩のところにナインと云う町がある。この町に近づき給うた時、主は町の門の近くで喪服に包まれた葬列に出会われたのである。

棺の中に安置されているのは独り息子で母は寡婦であると記されている。既に頼るべき夫を失った未亡人は、この独り息子を最後の頼みとし、この息子の成長を唯一の希望として生きて来たものと思われる。今やその唯一の希望は失われ彼女の生活の支柱は倒れ去ったのである。この母の悲嘆が如何に深刻なものであったかは想像に余りがある。

生あるものが死する事はこの世の定めであり人生の常道である。昨日も今日も、そして唯今も地上のどこかでこの事が起っているであろう。そして誰もこのことを不思議とはしないであろう。

聖書研究のための毎週の教案

単元二　教会の基礎

目標　パウロがコリントの教会に対して書きおくった書簡を研究することによって現実の教会が主のみことばにかたくたたねばならないことを明確にする。

十字架の言と教会

コリント　一・一八―二・五

(1)　筆者の牧する教会は遅くれた文化の中で卑屈といってよい程に自分を劣等視して、伸びゆく人を嫉妬の目で眺めるような、そして結構自分の日常生活には小市民的な満足を覚えている一小都市の中に立っている。首都での闘争も、ここに来るまでにその波紋の力は弱まってしまう。人間関係は網の目のように、血縁、財力、政治力でからみ合いつつ、そこに安住する限り、自分の生活の保障は成立する。適度な文化生活、機械のような日常生活の繰りかえし。時に信徒の顔をみて、この人達がキリスト者である事が不思議に思え、何か間違っているのではないかという錯覚を味う時がある。だが一度、この平和と見え、安住とみえる小市民の社会生活の感情のムキ出しの姿に触れると、不思議に思えるようなキリスト者の尊い姿さえ、この生活の中に彼らの惰性と停滞したものを見て返って深い絶望に襲われる。教会に何かが欠けていると考える。伝道の壁を思う前にその事を思う。地方にある教会の若い伝道者達が常に味う反省であろう。日本の教会がこの社会に対して根が浅さすぎるのだ。信仰の内面的独自性が弱すぎるのだ。その為、社会的諸関係の圧力の方が重いのだ。こういった中で、何をさしおいても、正しき意味での教会の訓練が必要になって来る。訓練は時間を必要とする。このような福音の表面的理解のためにどれ程自分達の信仰を弱め、十字架の宣言すら、色あせたものにして来たことか。パウロが教会の内にあるこの社会的諸関係の圧力に弱められ、且つその信仰の内面的独自性の衰弱に対し、それを大胆に見つめながら、懇切な指導と訓練を、さし迫った「時の縮み」の終末観に根ざしつつコリントの教会に迫っていったその気魄は、同時に、今日の私共が、自分に迫らねばならぬ警鐘と同様であろう。

(2)　第一の反省。それは私共の教会が、「十字架の言」に正しく固着しているかという事である。反省が分析に終始する時、それは信仰の活動力を後退せしめよう。正しき訓練に連らなる時、信仰は生命を与えられ、同時に自分自身の変化をさえ与えられるに違いない。この点を注意しつつ、考えを進めてゆこう。

「十字架の言」(ὁ λόγος ὁ τοῦ σταυροῦ) とは一七節の「知恵の言葉」(σοφία λόγου) に対して用いられ、「十字架の教、証」(NEB は This doctrine of the cross) の事である。中心は十字架において証しせられたキリスト・イエスの贖罪信仰の宣言である。それは神の審判の業と深い関係を持つ。今日の日本の教会の弱さはここにあると思う。パウロはロマ人への手紙二・三、四で「あなたは、神のさばきをのがれうると思うのか。それとも神の慈愛が、あなたを悔改めに導くことを知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との

（聖公会ではこの主日を信徒一致日として守り、個々の教会の信徒一致に止らず、教会の再一致問題について考え、この運動が促進されんが為に祈っていることを附記しておく。）

主題　真の謙遜

福音書　ルカ　一四・一—一一
使徒書　エペソ　四・一—六
旧約　ネヘミヤ　一・一五—二二

祈り　主よ恵みをもって常に我らの先となり、あととなりて、絶え間なくもろもろの良きわざを行なわしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説教

本日の使徒書、福音書では、信徒が心を一つにして主に仕える為に必要な心構えについて教えられている。

我国においては古来修身の道としての謙遜に就て教えられて来た。又戦前までは日本は礼節の国として知られていた。

しかし普通一般に謙遜と云う場合は多く外形上の態度とか言語動作などについて言われる場合が多く、他人の前では心にもなく自分を卑下したり、自分の能力を発揮すべき場合にさえ、殊更自分の技能をおおいかくしたりなどすることを以て美徳と考えていたようである。このような誤れる謙遜、偽りの礼譲は百害あって一利なきものと云わねばならない。

ギリシャ・ローマの倫理学においては謙遜の徳は受動的な徳であるからと云うので排斥されたと云うことであるが、これらは謙遜の真意を解しないところから起った誤りではなかろうか。

聖パウロはロマ人への手紙の中で「思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。」（一二・三）と言っている。

このことば程、謙遜と云うことについて正しく教えている言葉は稀である。

換言すれば、「自分を不当に評価して思い上ることなく、信仰によって自分を正しく評価せよ」と云うのである。

人間の傲慢、不遜、思い上りは、凡て自分を不当に評価することから起るのである。

しかも我々は神を知る事なしに自分自身を正しく知ることは出来ないのである。我々は神の光の中に無知無力にして罪深く汚れ多い自己を発見するのである。ニュートンが宇宙の限り無く広大である事を知って、自己の無力と無知を痛感したように、我ら神の偉大を知って初めて自己の乏しさを知るのである。

以上は謙遜の消極的一面である。そこで今一つの積極的一面とは何か。聖パウロは言う「神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって慎み深く思うべきである」と。

自分自身は無力であっても、我々には神から授けられ、託された能力があり才能がある、これは神の賜物であって断じて誇るべきものではないか、同時に、これは死蔵すべきものではない。

ここにこそ正しい自己評価があるのである。

我らの有てるもののうちに、神より受けぬもの、神よりの賜物でないものが何かあるだろうか。すべてが神よりの賜物であるとするならば、我らが人の前に誇ることは空しいことである。

（立教女学院チャプレン　大和田　功）

説教と権威を慕う余り、ひいきのひきだおしのような立場をとった人々である。第二はアポロ党。それはコリントの人々の感覚には全くピンタリする人物であった。その学者の知識とその解説の巧妙さと雄弁とは、少なからず「言の智慧」を尊重する彼らにとっては、「弁舌はつたない」（Ⅱコリ一一・六）パウロより如何ばかり魅力であった事か。第三はケハ党。それは直接ペテロの指導を蒙ったユダヤ人キリスト者の群の或る一部のものであったかも知れない。第四は「キリスト党」。右の紛争を避け、自分こそ純粋の福音信仰に生きるものと主張せる人々であった（Ⅱコリ一〇・七参照）。一体このような分党は何が原因であったのであろう。それは自分の直接な個人に密着した親愛観の結果であり、自分の好みによる真の感情的な動きに外ならない。パウロはこのような、信仰者としてあるまじき行為は、その信仰が「肉に属する者（σάρκινος）」だからだと言っている。σάρκινος とは主として人間生活を構成する諸要素を指示し、自然状況のままをいう。そこにはパウロのイロニーがある。つまり、信仰にありつつも、その信仰の未熟の故に、仮令悔改めの経験があっても、実践、又その知識においても、充分に霊的生活に発達しきらない、信仰と生活の分裂がそこに生れ、自分の好みによって自分の信仰を云々する。動機に悪意と謀りがないばかりに、それは手に負えない内容を持つ。個人への好みと愛情は、それが自分の感じの延長であるから、それは専ら自分の関心事が中心となり、結果はかえってねたみ（ζῆλος）と紛争（ἔρις）が生ずるのである。自分の関心事が中心となる限り、言葉における、主、教会、聖霊はあっても、それは完全に無視されている。まさに、神への ζῆλος が信仰の熱心であるに比し、人間への ζῆλος は、ねたみとなる。ここに今日の教会が、まず充分に反省しなくてはならない点があった。

(2)　この紛争が、歴史の歩みとからみ合うと事はずっと面倒になる。今日の教会内の問題を越えて、教会相互の、教派としての分裂は、或る信仰の、或は宗教政策の歴史的な必然性が、同時に普遍妥当性を主張する所に起る。入信のてだてとしての個人の関係又教派が、様々な人間の関心事の相異に力点をおかれて、その存在性を強調する。事は既に神の業を離れた人間の業である。そうすると信仰はローカル教会の一個の姿、又自分の信仰に力点が移り、今日の分裂せる世界の唯一の仲保者として負わされている教会の権能は、そのまま、その分裂せる世界の中に、同じ姿を以て埋没してしまうようになるだろう。今日の教会の弱さは、実はここにあった。

一体今日の教会の分裂は、このような型となっているか。此の事の理解は一方で解決の困難さを示すと共に、信仰者にとっては己れの罪の姿と、その深さを知る事により、なお一つの交わりへの希望を神により与えられている事を味わう故に此の世の和解への道筋をも見出すに違いない。クレイグは次のように言っている。（「一つなる教会」参照）。「(1)ある一派が完全に支配していて、他の諸派が大体において無視されている地域、(2)二つの相対抗する団体がほとんど互角の勢力を有する地域、(3)教派主義のはげしい地域、(4)外部から来る宣教師の影響をうけて分裂がつづいている地域。」この四つの型をあげ夫々特有の危険性を提示している。(1)の場合、それは独占の危険と、少数者の権利を無視する危険。プロテスタントにあってはその相異の持ち寄りが大きな一致への道を開かぬ限り、独占的無頓着と原子論的教派主義の板ばさみにあうだろう。(2)の場合、それは歴史的な結びつきが大きな原因となっている地域が多い。即ち言語や、人種的起源の相異である。問題は為に外に向うより、内に燃焼して、時に信仰の弁証が、同時に他の分裂的要素の支持と混同される。(3)の場合、これは問題外だ。(4)の場合、それは若い教会が発展しつつあるところの、ミッションの現地。私共の関心

富を軽んじるのか、と志している。私共日本人には古来、「罰」の思想があった。罰における因果関係は、人間の魂に罰への恐怖をひきおこし、その日々を煩わしめこそすれ、或は現実よりの逃避として求められるような、現在離脱の信仰を与えるばかりである。新興宗教の暗さはここにある。又一面の楽天さは、神道的現実主義の与えるもので、「罰」を超克することによって、倫理観を喪失せしめる。神の審判はこれと異なる。もし、罰の如く、常に人間の行為への直接的な審判として生ずるならば、罰の持つ恐怖に与えるのみで、信仰の自由は与える事が出来まい。審判の即刻に与えられない事は、第一にこの事への留意である。だからといって、人間の神への罪が見過しにされているわけではない。キリストにおける贖罪の業とは、私共の「悔改め」への導きの業であり、この事を通し、神の救が成就すると共に、私共の罪の自覚が生れ、ここに神との正しき愛の関係が回復されるのである。神の人間への関心は、この新しき契約による人間との関係の回復にある。十字架を除いて、これを明らかにさせるものが何処にあろうか。それ故十字架の言は、私共の信仰の中心であるはずだ。

(3) 前にもどろう。一体、では先にのべた社会的諸関係の中にある正しき人間でない私共の状況への自覚は、今日教会によって与えられたのだろうか。多くの場合、(一)ヒューマニズムにより、(二)実存主義により、(三)ニヒリズムにより、(四)人間共同の歴史的運命の意識によりそれぞれ人間の自由の問題との関連の中に自覚されて来たといってよい。それは或る意味ではよい路線であった。しかし、一度自覚されたこの問題は、近代ヒューマニズムの系譜に照らして眺める時に、勢い、この新に獲得された人間の存在の意味を人間の意志と行動という事に追求するという結果に陥り、いわゆる主体性の形骸のみが残されている事にきづかねばならぬ。それは行動による自己規定の主体性の確立が人間それ自身から生れて来る結果である。私共のキリスト教への接近は、今日、自覚すると否とにかかわらず、この縁からではなかったろうか。この自覚が、再び、根源者に、即ち神に帰る事によって、真の人間をそこに見出したはずだ。たどり来った道程からすれば、福音への出会いは、かけがえのないものである。そこに十字架の言が生きて来ぬはずはない。十字架の言はこの自覚の中に私共のものとなる。それならば、十字架の教えの宣言は、即ち宣教の業が、今日の日本の社会にあって、そこに結びついてなされなければならぬかは、自ずから、明白であろう。それはまさしく対ヒューマニズムの問題なのである。

紛争に対する警告

Ⅰコリント　三・一―一七

(1) 「教会は生ける主イエス・キリストの生ける団体である」(バルト)。そこに約束されている永遠の生命、唯一なる聖霊の働きを思うとき、なぜ一人の主により召されたる団体が、その召しに力点を置かず、召されたる姿の表面上の相異を敢えて主張して、こうも分裂ばかりでなく、紛争すら起すのであろうか。パウロはこの問題の深い原因をコリント教会の信徒の信仰の中に鮮かに私共に示して下されるのである。当時コリント教会にはパウロの伝道、教会の設立の後、アレキサンドリヤ生れの雄弁な、しかも聖書に通達していたアポロなる人物が到来し、パウロのように対外的というより、教会内の人々に信仰の指導をなした。それが直接の原因となったのであろう、ここに四つの党派が生れる結果となった。第一はパウロ党。パウロは最初に福音を伝えた使徒である。それ故、彼の人格と

えられる諸々の賜の把握に外ならぬ。この個々に与えられる聖霊の賜は、それ故、「当然救済史の進展のために用いられねばならない。そしてこの出来事は現在のキリストの体たる教会に於て行われるのである」(同)。「イエスは主なり」の告白は、この教会と聖霊の賜の救済史的理解に導く所のものである。

ここに於て始めて「教会の忠実な管理者」の理解も進められなければならなかった。パウロにあってその使徒の自覚は「一回限りの救済史的役割を果すこと、即ち、教会のために、終末にいたる迄ただ一度限りの基礎を決定的に据えることにあった」。使徒は、彼の職務が神がその独自な形において神の救済史を継続すること、彼の職務の奥義(μυστήριον)の経論に(οἰκονομία)属することを知っている。この意味において、パウロは、神の奥義の管理者(οἰκονόμος μυστηρίων Θεοῦ)(コリント四・一)という特徴ある言い方で自らのことを表現している」(同二二九頁)。されば管理者とは神の救済の教説を司るという意味に止る事ではなく、どこまで神への積極的な責任として(モファット)、救済史を積極的に進展させる事が、役務としてある事を自覚せねばならない。パウロはその意味で、異邦人への奥義の伝達を、そして彼らにそれが生きる事を司る事をその宣教の使命として受けとった。それは神の救済計画と密着している使命の自覚である。

「キリストの教団における最もとるに足らぬ務めと雖も亦、救済史の一部をなすものである」(クルマン同二三〇頁)。

一体、私共は、この一回限りの生命の中に、この使命の自覚を如何程有しているか。神の言の宣教に遣わされる使命感、召命感とは、斯る管理者の役務の場所と、賜の受容と、主への一つなる告白の中に、判然と見出してゆく事であらねばならぬ。今日の教会は、この使命感に欠ける所が大だ。

単元三　キリスト者と現実の生活

信仰者の現実は、終末的であり、この世にあっては、信仰の決断によって、自己を決定して行かなければならない。

清く生きる

Iコリント　六・一二―二〇

(1) 清い生活をする事が何か軽蔑の念をもって眺められる今日の情況の中で、私共はともかくすると、その少数者の故に、さまざまな態度、生活の在り方が、不統一と混乱の中に導かれているのが、今日の教会の偽らぬ姿であると思う。一体どういう形で、私共は自分の信仰にふさわしい生活の清さを持つことが出来るのだろうか。かつて日本にあって「清い」生活は、さして深く主キリスト・イエスの十字架と関係を持たず、むしろ、それより離れて「耶蘇教」の名を以て冠せられるあのアメリカ的ピューリタニズムの影響の中で生れた禁慾が、新しい社会改革のエネルギーと、古い封建秩序に対するその実際的生活態度として「禁酒、禁煙」つけ加えるに「廃娼」という事を意味していた様に思う。所が今日この禁酒・禁煙という事柄が一度教会の内で論ぜられると、いつも奇妙な解釈又弁解ともいい得ない感情の中で、結局要領の得ない所で、話がチョンになってしまう。この曖昧さが、今日もう一度「清い生活」の意味を反省させ、新しい生活の倫理に私共を導く事を私共に強いていると思うのである。この曖昧さとは何か。教会の置かれている事態が、既に「耶蘇教」の時代と異った歴史的な意味を持っている事、又プロ

はこの最後の所に最も向けられてよい。ここに生れる問題は第一に他国の分裂がどうして私共の現在の信仰にそのまま持ちこまれてよいのかという事。第二に神の国よりも、その宣教の母教会への忠誠。第三にそれに対抗する国民のキリスト教会への傾向といった事。宣教百年の記念式典の祝辞の宣教師側のプログラム外の飛びりと、それを当然のようにうけ入れている主催者の動きの中に、過去の歴史にのみ固執して、一致の要望たる将来への瞳みのなさを筆者は味わった。コリントの問題は、今日の教会内の問題、又、世界の教会への問題である。世界の歴史の問題ですらある。

忠実なる管理者

Iコリント　四・一―五

(1)　教会の忠実なる管理者の自覚は、私共信仰者の主キリストとの深い関係の自覚のない所には生れて来ない。一体原始教会が把握した「イエスは主なり」の信仰告白は、今日の私共の信仰の中でどの様に生きている事であろう。それは唯単なる主従の関係に止っている場合が多いのではなかろうか。飜訳された言葉の語感から、自分に都合のよい自由な解釈がそこに在るとすれば、口で信仰を言い表わしてはいても、それは真の主と共なる信仰であるとは言い難い。

さて原始教会の「イエスは主なり」の信仰の告白は二つの本質的な要素を含んでいるといわれる。一、キリスト・イエスが神の御子であること。二、彼が死と復活との後に、キュリオス（主）の権威にまであげられたもうたこと（クルマン「原始教会の信仰告白」邦訳七三頁）。そして第一の告白は第二に基づいてその信仰が確立したのである。従って「信仰告白の中心、その頂上は、神の右に挙げられたもうたキリストである」（同七四頁）。そこには鮮かにキリストの現実の支配、それはこの歴史のみならず、全宇宙、又天と地の諸力に対してその統治が彼に与えられている事が、示されているのを見る事が出来るであろう。そしてこの大いなる神の奥義が、キリスト御自身を通じて、この世、即ち歴史に啓示せられたのである。この歴史に啓示せられ、その歴史がその支配の下にある以上、此の神の救済の意志は全ての人間に関りを持つ。信仰者とは、その罪を十字架に於て自覚すると共に、その審きに服しつつ、右の信仰を告白する事によって、教会の交わりに加えられ、救の恩寵を信ずる者とせられたのである。現在にある信仰者は、従って、主の告白の中にかかる救済の線の上に立つ自己を発見しつつ、同時にその隠れた見えぬ神の支配を、見ゆる形としてのこの地上の教会に対する密接な関係に、見るのである。されば、見ゆる私共の現在は、どのような形をとるにせよ、神の救済の歴史にあっては、「教会の時」であるという事が出来よう。今日、時の理解、歴史の評価において、私共の信仰の確信も、不安も、実は、この自覚如何に関っているという事が出来よう。

(2)　此の歴史にありつつ、教会の時に置かれて居る以上、「イエスは主なり」の信仰告白は、私共に、時の緊張関係を生ましめる。それに歴史の無限感覚が、私共をしてニヒルに導くこの時にあって、私共は、現在と未来を、己が時として所有せしめる力を与えられるのである。それが希望を生むのである。クルマンはこの教会の時に在る事により「これに属する事は、個人にとって、救済史に積極的に与るものとして明確な場所を割当てる」（「キリストと時」、邦訳二一八頁）といっているが、それは、まさに右の事を指しているというべきであろう。ではこの積極的な時の把握と働きの場とは何か。それは教会に於て与えられる役の理解、即ち聖霊によって与

信徒学級

単元一　宣教の教会

改革の教会

ローマ　一・一七



教会には、神にのみ属する部分と、人間の側で参与できる部分とがある。神のみ手にあることを、人は、改革することはできない。改革のできるのは、教会のなかにある人間的なものだけである。人間的なものが、まじることによって、神にぞくするものさえ、おおいかくされることが、教会には、しばしば起るのである。中世紀のキリスト教会は、いちばんよい例である。

宗教改革においては、何がおこなわれたのであるか。改革者といわれる人々は、多かつたので、一色にぬりつぶして考えることはできないが、立役者たちが、神のものを神に、そして神を神としてあがめるため、キリスト教の純粋性の回復をねがったことは、まちがいないのである。しかし、ある者は、目的のためには、暴力をも辞さなかった。ある者は、武力に訴えることをしりぞけて、みことばの力にのみ頼ろうとした。

宗教改革が、教えるものは、教会において、人間的なものが、入るおそれのある領域は、いつも、改革の必要があるということである。だから、十六世紀の宗教改革では、その改革の規準を、高くかかげて、これを目指して進んだのであった。たくさんの失敗をくりかえしたといっても、基本線は、各時代にうけつがれて、今日のわたしたちの教会にまで、伝えられているのである。

その規準は、「聖書のみ」「信仰のみ」ということであった。神が、キリストによって、人間の救いを完成して、失われていた神との交わりの道を開きたもうたことを知らせるものは、聖書だけであって、他のどこにも知らされていない。このような、神の救の、みわざにふれ、これを「わたし」のものにするためには、「信仰」だけが、役立つのであって、他のどのようなものも、役に立たない。

教会問題を考える出発点は、ここからである。キリストを信じる信仰者ではじめて、教会の改革を考えることができるのである。十六世紀において、教会の改革を考えた者は、必ずしも、信仰の立場から、純粋にこのことを考えたとはかぎらなかった。愛国の立場から、領土問題の立場から、経済問題から、改革に参加した者も、多数あった。しかし、教会に関することは、いつでも、不思議な要素が、背景になっているので、余りに人間的な思いだけから、問題をとりあげる時は、改革は、改革とならないで、混乱をきたし、結局は、失ってはならないものをも、失ってしまうこともありうる。

「危機」という言葉が、よく用いられるが、事実、神が、一瞬一

テスタント主義の、あのエートスのエネルギーが、それ故に今日の教会の生命になり得ない事。そして信仰の自由の問題が作らした信仰の内面化の規定が、キリスト者の生活の技術の指導性を失わせてしまった事（それは矯風会の運動の色あせた姿、キリスト教的社会主義の凋落の中に如実に見られる）。更に私共日本人が祖先より受けついだ、あの仏教的寛容さ、儒教の倫理主義の自己抑制が外面のみに関って、内面的統一を強いなかった事、又神道の無倫理性が、いつとはなしに、私共の意識を平盤化に誘ってゆくという事によって、知らざる内に「清い生活」への曖昧さが生れて来たのである。それは先に指摘したように、主キリストとの関係なしに出来上っていた生活の外的な形態に、それが、すぎなかったからである。

(2)　聖書の示す倫理は終末時の倫理として語られている。事実歴史は主キリストの降誕によって新しい世界に突入した。既に終末の時に入った。キリスト者は此の終末的現在にあって、義とせられ、かつ全き義とせられん為に努力しつつある者である。ここに、パウロの直接法と命令法とが並置せられている、いわゆるアンチノミーを見出すのである。すでにキリスト者は自由の者である。バプテスマにより、罪を赦され、永遠の生命に入りし者、古き律法より解放されて恩寵の世界に移された者である。それなのにパウロは倫理の命令を発する（Ⅰコリ六・一一、一八以下）。ここに私共の視点が向けられなければならない。右の救の事実は終末において完成する事柄である。そのキリストの支配は確立されているが、それは未だ全領域に及んでいない。そこにクルマンが図式するように、キリストを中心に置いた二重円の世界、中が教会＝キリスト者の群、外が此の世。終末に向って中心の世界が外に向って拡大される。この二重の構造の上に、私共の生の緊張が迫り来っているのである。この緊張とはアンチノミーのそれである。救はまさしく在る。それは信仰のザインである。外なる世界に向う時、この緊張の切迫の中で、それは命令として私共に迫る。ここに救われている故に、救の生活が生れて来なければならぬ。同時に救の生活を送る必要のあるのは、自己の救われている事がその生活で証明されるからである。ここに倫理生活の意味が明瞭となり、私共の「清き生活」も、生れて来るのである。

ここに此の世とは、まさに私共にとってはこの日本の社会である。そこでこの「清き生活」が意味する所を求めねばならぬ。注意したい事は、先の日本の初代教会の倫理性が、常に否定の型で生れて来たという事である。それは禁酒であり禁煙であり廃娼であった。聖書はこの否定の形で命令法をなさぬ。直接法が同時に命令法であるという事は、モーセの十戒が、断言命令としてある事と同じである。唯一の神に創造られ、その愛の内にあれば、如何にして異神を拝し得ようか。拝し得ぬ。それ故ヤハウエ以外何をも神とする事は出来ぬ。だから神を信ぜざるを得ぬ。故に信ずべし。即ち、この終末時にあれば、その御旨にふさわしい生の在り方に生きねばならぬ。この生きざるを得ぬ事が生きねばならなくなった時、そこに結果として生れて来るのが、私共キリスト者の倫理なのだ。それは捨てるべき自己の認識に連らなる。神なき時に私に主であった罪の諸相の認識である（ロマ一・二九以下）。この事が私共を結集として「清い生活」においやりつつ、同時に人々の批評に耳を借す事なく、それに生き得る者となるはずである。それは「決断」の美しさに外ならない。この決断に立つ時、命令法は直接法となる。今日のこの決断とは何か。崩壊に近き社会構造の中に、新しい倫理の大道を築くことだ。まず第一にそれは「性」の問題と関連するだろう。次から、この具体的な問題に入ってゆこう。

宮崎教会牧師　桜井　一

ある。他者に仕える最大のことは、その他者をして神との交わりをもたせるところまで導いていくということにほかならない。

キリストは、何人にも隷属しない王であられながら、全人類の救いを完成されたのである。これこそ最大のわざであって、キリストが、全人類のために仕えたもうたことが、生きた原型である。とはいうものの、人間の社会で日毎にあらわれる出来事は、数学の公式をあつかうようには、いかない。いろいろ複雑な要素が、いりまじっているので、それに対処することは、決して容易なことではない。

わたしたちは、あまりに、問題の単純化をねがってきたのではないであろうか。キリスト教が、つたえられても、異教社会の教会は、思うようには、のびない。教会がのびないとき、問題になるのは、教会と社会との接触について技術的な考えが、めぐらされることである。戦後は、戦前にまさって、保育事業に目がつけられた。しかし、このことが、教会のもつ「仕えること」の特色と、どういう具合に、むすびつくのであろうか。教会と社会とは「ギブ・アンド・テーク」（有無相通ず）の原則で、むすびつきが、できると考えるかもしれないが、宣教の面が、必ずしも、これと平行しないところを実際に見れば、ここにも問題はあると思われる。

「問題の単純化」という表現は、あてはまらないかも知れないが、異教社会にある教会の態度としては、あまりに、安易な道をえらんでいるのではないかということである。保育事業にしても、社会福祉事業にしても、仕える教会としてこれを行うことは、邪道ではないであろう。問題は、真に仕える教会として、終始しうるかどうかということである。ミイラ取りが、ミイラになることもありうるのである。教会内において、この方面における議論が、案外聞かれないのは不思議である。

ボンヘッファーが、「安価なめぐみ」について語っているが、安価なめぐみとは、神による罪のゆるしではなくて、罪に対して寛大であり、罪を肯定するような考えで、キリストの十字架という高い代価を払ってえられためぐみではない。教会は、いまのところ、一般会員よりも、牧師の発言が大きく影響し、安価なめぐみが、説かれても、そのままうけている状態である。牧師の生活の安定の手段としてのみ、教会の特色としての仕える面が考えられるなら、それは、大きな問題ではないであろうか。免罪符を売り出したローマ教会の企業計画を笑うことはできない。

教会は、キリストとも苦しみながら、働き人の食を得ることの正しさを保証されて生きていくのが、教会の行き方ではないであろうか。企業化された教会経営法は、今一度、考えなおされてもよいのではなかろうか。かつて、聖なる目的をかかげて、幼児教育に、青少年の教育に、老人の保護に、いばらの道をきりひらいたキリスト教会の開拓者精神は、いまは、官公立に追いつくことに懸命であり、他の私立の施設を模倣する有様となったことには、経費、その他の理由があったにしても「仕える教会」としての何かを欠いているのではなかろうか。

教会によってかならずしも一様ではないけれども、教会の伝道、付属事業等が、教会員全体の自覚に立っておらないのではないか。「献金だけはおさめます。あとは、どうぞ御自由に」といった気風が、いつとはなしに一般化しているのではないか。それは、ローマ教会の聖職と一般信徒とを区別することと一脈相通じてはいないのか。牧師だけの教会。会員は、日曜の礼拝に集まることを要求せられ、それをすれば、あとは用のないものとなっていないか。時に教会員総動員とよびかけられても、反応はきわめて微弱である。どこ

瞬、この世に、はたらきかけて、おられる限り、その一瞬一瞬が、危機である。神のみまえで、この世界が、幾千万の人間をのせて、廻転しているのであるが、そして、刻々変化しているのであるが、突如一発の銃声で、全世界が、戦闘にまきこまれることもある。平穏無事と思われる一瞬は、実は、この世にはないといってもよいのである。神の活動と、人間の活動とが、いつも、からみあって、この世の現象をあらわすのである。

このような状況にあって、教会につらなっている者の動きは、三つある。一、神のみことばの力に絶対の信頼をかける。二、神のみことばにも、信頼をかけるが、同時に、人間の計画的行動をも、同列におく。三、教会を人間的社交団体または、社会革命の団体と考える。いずれの場合においても、キリストの名においてなされることはもちろんである。この態度は、現在の状況のなかで、行動面にあらわれるのである。そして、あるときには、この三つの態度の間に、はっきりとした線を引くことが、できないのである。この事実は、第二次世界大戦を通過した者が、よく知っていることである。また、外部的な事情によって、たとえば、全体主義国家のような場合においては、この三つのどれもが、自由に行動できないこともありうるのである。

いま、わたしたちは、最も自由な立場におかれているが、それだけに、日本における宗教について重い責任を負わされているといわなければならない。宗教の責任とは、ただ、あらわれてくる社会現象を次から次へと追っかけていることではない。また、好機の来るのを手をこまねいて待つことでもない。ここが、日本のキリスト者の考えどころである。終戦後十有余年を経て、考えさせられることは、宣教の方向が、決定していないという点である。根本方針の上台のうえに計画が立てられるというよりも、むしろ、計画が立てられてから、説明がつけ加えられるといった格構ではなかったか。したがって計画と計画との間に一貫したものをもたないことになるのである。異教社会にある教会の問題、ひいては、キリスト教と諸宗教の問題、さらに、教会自体の問題として、教会内における教職と会員との問題等、大胆に考えなければ問題は多いのである。

教会の使命

エペソ　一・二〇―二三

教会が、交わりであることは、しばしば語られているので、よく知られている。しかし、教会は、また、仕えることをも特色とするのである。

キリストの教会が、交わりであり、仕えることを特色とすることは、キリストが、そのようなものであることを知るからである。キリストを媒介にした交わりについては、すでに、考えてきたので、ここでは、仕えることをとりあげることがよいと思う。

キリストは、教会の主でありたもうとともに、この世の主でもありたもうということを、わたしたちは、わすれがちである。このキリストが、「仕える」ために、この地において生涯をおくったということのうちに、「仕える」ことの本当の意味があらわれている。

神が、人となりたもうたという事実をキリストにおいて見るとき、わたしたちの水準で、わたしたちに接近する神を見るのであるが、このことのうちに仕えることの真の内容が、もられているので

的な交わりとは、各自が共同の宣教の責任を神のみまえにとるということであろう。初代教会の兄弟姉妹たちが、あのような気はくをもって立ちあがった秘訣を学びたいものである。

　使徒行伝は、聖霊による行伝といわれるが、今日、わたしたちは余りに、技工にはしりすぎてはいないであろうか。聖霊にみちびかれて行動するということを忘れているのではないであろうか。教会における人為的な計画のほうが、聖霊のみちびきよりも、もっと確実なことのように考えるのではないであろうか。

　聖霊のみちびきに身をゆだねることこそ、いま、教会の全会員にとって、もっとも緊急な問題であるとき、そのことと、もっとも縁遠いのが、いまの教会の実情ではないであろうか。

　宗教改革の時代において、そこには、二つの型の教会があった。一つは人為的な織組に信頼した団体であり、いま一つは、聖霊によって立つことを意識した教会である。聖霊による教会は、日々、死ぬことを実行する教会である。キリストにある者は、まず、死ぬからである。死のなかから、生命があらわれるのである。

　ルターは、小教理問答のなかで、バプテスマのことを説明して、それは、おぼれ死ぬことであるといい、そして新しい生命に復活することであるという。教会が、新たにせられるためには、死ぬことを必要とする。教会の弱さは、自分に生きるところにある。死ぬことによってのみ、キリストにある新しい創造をうけるのである。日本の教会の進展のおそいことが、世界中に伝えられているが、桧舞台にのぼるのは、これからである。大根役者か、千両役者か、それは、死ぬことができるか、できないかによって決定せられるのである。

宣教の教会の機構

Iコリント　九・一九―二三

現在の日本の教会を見わたすに教派によって多少の差異はあるがやはり、異教社会にある三種類の教会の類型を見る。宣教師中心の教会、牧師中心の教会、成長した教会の三つである。第三の部類にぞくする教会でも、第一、第二と同じ内容をそなえていることもある。一般的に言って日本の教会は「与える教会」であったと思う。この意味は説教はもちろんであるが、聖書研究会でも祈り会でも他の集会でも自発的な面がすくなくて、牧師または、その他の教会の奉仕者が、「与える」「きかせる」ということが、多すぎはしなかったであろうか。もちろん、そのような行き方のなかからでさえ立派な信徒が出て、よい指導者になっている例も多いので、単純にこのような言い方をしてしまうのは、当をえていないかも知れないが、せまい見聞をもとにしていえば、そうである。そこから、どのような結果がうまれるかといえば、教会の集会が興味本位になりがちである。教会の本質からはなれてしまうこともありうる。さらに牧師と一人一人の会員とは、むすびついても、会員同志の横のつながりがないという現象も現におこっている。これを裏がえせば、一人一人の会員に主体性がなく、牧師次第の教会になってしまい、その牧師が交代すれば牧師との関係をもっていた会員は、退却してしまうということになるのである。きわめて極端なそして素朴な例であるが、次のように言った人がある「神は、男と女とを合せて夫婦となさる。人はこれをはなすことはできない。それと同じように、

に欠かんがあるであろうか。キリストの教会が交わりであり、仕えることを特色とすれば、それが教会の真実の姿として前面に出なければならない。それが見られないのは、なぜであろう。

宣教的な交わり

エペソ　四・一一—一三

宗教改革における再発見のなかに数えられるものの一つは、聖職も信徒もみな、神のみまえにおいて、祭司であるということであった。ペテロの第一の手紙二・九には、「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である」と記してあり、そこには聖俗の区別はない。キリストを信じる者は、みな、祭司であるという万人祭司説によって、ローマ教会の、聖俗二元論は、くずされたのである。

しかし、わたしたちは、怠慢であれば、ふたたび、聖俗二元論におちいる危険をもつのである。ヨーロッパでも、万人祭司説の再発見が、いわれているが、歴史の浅い日本においては、そのことの再発見ではなくて、むしろ、教会の本質の再教育の段階にあるといわなければならない。

教会は、いつも、全世界に福音を宣教することを命ぜられているので、宣教師は、世界のはてばてまでも派遣せられる。新しい伝道地では、三つのステージを通過する。第一段階においては、つかわされた宣教師が、中心となって、福音を説教する。第二の段階においては、日本の場合をとれば、日本人の間から教職が訓練されて、教会のはたらきにおいて、肩がわりするか、宣教師の協力者となるのである。第三の段階においては、教会のあるべき姿をとることになるのであるが、この段階が、いちばん困難である。宣教師中心の教会の時期は、比較的短いが伝道地において訓練せられた教職中心の時期は、案外長いのである。この原因は、教職の専門的知識の深さに比して、多少の例外があるにしても、一般的にいって、会員のキリスト教知識の浅いことによるのではないであろうか。これは、ひとり、日本においてだけのことではなく、世界中の教会の実情であるかも知れない。

信徒の再発見が、いわれるのも、以上のような背景をもっているからかも知れない。いずれにしても、教会が、どこにも、弱点をさらけ出していることはあらそわれない事実である。教職の指導がなければ、教勢は下り、活動は、にぶり、教会生活は、この世の生活と何の変わるところもなくなり、一週間の働きのいこいの場所、社交場となってしまうところも見うけられるのである。このようになれば、ヘルス・センター式の施設が、むしろ効果をあげるのであろう。

キリストの教会が、家庭企業化されるなら、それは、おそろしいことである。音楽教室、保育事業、そして日曜日の精神修養といった図式が、あらわれる傾向をもついまこそ、会員全体の問題として検討をせまられているのではなかろうか。

社会との接触面を広くする意味において、共同体の要求にこたえて、いろいろな企業を計画することもありうると思うが、それが、牧師だけの計画であれば、大きな問題である。教会全体としての計劃ならば、細々と行うことに問題がある。

教会の第一になすべきは、教会の会員全体の結集であろう。宣教

老人の問題

——老人の日に——

伸びてきた寿命

教会の中で比較的忘れ去られているが、しかし重要な問題は「老人の問題」である。わが国の教会は若い者が多いので老人の問題が深刻に考えられないのだが、信仰生活が老年に至るまで続かないということ、老人に対する温いおもいやりや愛が足りないことは非常に問題であると思う。

戦後老人の寿命（平均死亡年令）は急激に伸び、この十年間に男が九才、女が十才ものびて、ほとんど先進国に追いついた。すなわち寿命は男六五才、女七〇才に達したのである。これは医学、衛生、生活環境などの発達改善によることで、はなはだ結構なことではあるが、同時に仕事のない老人、世間のもてあまし者となった老人、又そう自分で卑下して世の中を淋しく送っている老人が多くなったことは問題だ。日本の職場ではいまだに定年退職制ということがあって、男子五五才に達すると、まだ体はピンピンしていながら辞めさせられてしまう。残る十年間を本当に持て余ましてしまうのだ。定年制は西欧諸国では大体六五才で、日本より十年長い。（英国・米国六五才、カナダ・ノールウェイ七〇才。これは真剣に考えねばならぬ社会問題である。アメリカでは四八才のケネディ大統領が出たほど若いリーダーシップを要求しているが、このことは同時に老人になると仕事がなくなるという悲劇を生んでいる。昨年私が行ったインディアナ州の組合教会の総会議長は何と二九才の独身の青年であったし、州の壮年会の会長が三〇才であった。

老人問題の研究

老人心理学は心理学の中でも最も遅れて発達した学問で、ようやく近年になって脚光を浴びて来た。この方面では大阪市立大の橘覚勝教授が先覚者で、既に昭和九年に「文化の発達と老人観の変遷」（浴風園調査研究紀要）[illegible]教養文庫）を刊行していられる。（同教授はたまたま私の高校時代の恩師、受持教師であったのでよく覚えている）昭和二七年大阪市社会福祉協議会で女子大生の老人観が調査され、昭和三一年、河出書房から現代家族講座が出されたが、その第六巻「家族の扶養」中第六章「老人の座」が収められている。又旧家族制度の崩壊と新家族制度の発達を考究する家族社会学の方面でも祖父母―親―子関係が究明せられている。小山隆編『現代家族の研究』（弘文堂、昭和三五年、一二〇〇円）は農山村部落と都会の親子の意識を調べた貴重なものである。

以上の如き研究を通して明らかになっていることは、わが国の老人の状態は必ずしも本人たちが悲観するほど悲惨な状態にはなっていないということである。旧家族制度の急激な崩壊は老人にまでは余り及んでいない。これは家の近代化がまだ完成せず、封建遺制が強固に残っているとも考えられるが、余り急激な変化を嫌うわが国の国民性にも由来することであって、社会の犠牲者を最小限に止めようとする美風であると私は思う。

親子関係の意義

東京都内高校三年と女子短大生二五〇名お

牧師と会員とは、神のみまえで一つである。その牧師が転任したからといって、他の牧師につかえることはできない。だから、わたしは、わたしの牧師が転任されたので教会には出席しない」。

日本の教会に筋金を入れるときが、きているのではないか。各教団には、この方面の研究をゆだねられている委員会も一つや二つではない。よい研究が発表せられてはいるが、まだ「これだ」と手をうつ名案はないようである。

そこで、一つの案として考えたいことがある。それは、教会を中心に集まることを堅持しつつ、これを強化する方法を見出す努力をしようではないかということである。第一に「主の日」を守ることを放棄することはよくない。しかし、神のみことばに接するのに日をえらぶ必要はないのではないか。問題は、こういうことにあるのではなく、「態度」の問題にある。「聖書研究会」とか「祈り会」とかいっても、それらは、「集まらなくてもよい会」になっており、自発性を欠く会となっている。もちろん、青年会などで計画される読書会などに自発性が見られないことはないから、自発性を欠くと言いきることはできないであろう。

そこで、わたしたちは、中世紀の教会と宗教改革とを比較してわたしたちの態度決定の参考にしたいと思う。中世紀の教会においては、「与える」面が、非常に多かった。教会の教理も、信徒の行為も、救いの筋道も、みな教会が指示した。その結果は、教会の世俗化であり聖職の堕落であった。これは、中世紀の教会のことだけではなく、「態度」の問題であるから、教会内にこのような態度があらわれるなら、どの教会でも、このようなことがおこりうる。

宗教改革においてはどうであったか。指導者があったことはもちろん考えられるが、それにしても、一般の民衆が、おどろくべき熱情をもって、神のみことばを、むさぼり読んだし、聞いたし、また考えた。これは、一体どこに原因があったであろう。第一に考えられることは、指導者が「生ける神」に聖書において出会い、これを聖書の翻訳と、説教と、文書とをもって民衆にわかち与えたこと、民衆は、主体性をもって、一人一人が、これに応答したことであった。第二に考えられることは、生ける神を信じる信仰は、実生活とはなれていなかったということである。信仰はいきいきとしたもので、生活全体をふくむものであるとは、宗教改革のなかにいた人々の確信であった。

これを、わたしたちの教会に、もってくることはできないだろうか。一六世紀と二〇世紀とでは時代のズレがあることはわかるが、そこで、民衆の心をとらえた、「内容」だけは、今日の教会にも通用するものであるし、それどころか、今日の教会が、その内容をもっていないところに問題があるともいわれるのではないであろうか。

具体的にいえば、教会とは、建物に制限されているものではないということであり、二、三人主の名によって集まるところそこに教会がある。みことばの語られるところそこに聖霊のはたらきがあり、聖霊のはたらきのあるところ、生命がみちあふれる。さらに、一人いるときも、自発的に「みことば」を聞く態度のあたえられることを祈りたい。どうしたらそれが実現できるかお互に、祈りつつ工夫したいと思う。聖書研究会と看板をかかげない「聖書にきく時間」が、各自においてもたれることをねがっている。そして年に何回かダイナミック式の聖書にきく会を開く。このようにして時をかけて盛りあがる気運をつくるとき、聖書研究会でも他の会でも「与えられる会」ではなくて、「わかち合う会」となるのではないか。家の教会の現代版の実現を考えたいものである。

（日本福音ルーテル教会議長　岸　千年）

家庭教育と両親

九月の婦人会

聖書　ヨブ三一・一八。エペソ六・四。

こども—特に幼年期—の教育にあたって、いちばんたいせつなことは、こどもの心に安定感をもたせるということです。この安定感が内にないと、どんなに外に教育的な技巧が施されても、けっして効果はあがりません。では、その安定感というものは、どうして与えられるものでしょうか。学校や幼稚園、その先生や施設は良い環境となって、こどもの心に安定感をもたらします。しかし、なんといっても、家庭にまさるものはありません。家庭で自分たちはほんとうに愛されている、という意識のあるところに最も深い安定感が根ざします。こういうわけで家庭は人間を形成していく上に極めてたいせつなものです。

父母の協力

さて、家庭といいますと、そこに父と母が考えられます。そしてこどもの教育のために両者が力を合わせねばならないことはいうまでもありません。「父は照り母はなさけの雨となり、同じめぐみに育つなでしこ」。この父と母の愛情につつまれて、こどもの心身はすくすくと延びるものです。聖書には「父たる者よ、子供をおこらせないで、主の薫陶と訓戒によつて、彼らを育てなさい」とあります。昔は産業が家庭で行われました。従ってこどもの教育に対しても父親が主なる責任をもっていました。産業革命後、産業の形態が変わり父親は外で働かねばならないようになり、いきおいこどもの教育の責任は母親の手に移ってまいりました。だが昔も今も同じこと。父親だけで、また母親だけで、りっぱにこどもを育てあげることは、なかなかむつかしいものです。よい家庭からよいこどもが出ます。そしてよい家庭とは夫婦がいつも高い目的のために一致して協力する家庭なのです。

厳父慈母

少し前までの教育的理想の家庭は「厳父慈母」型とされていました。父親は秋霜烈日といったきびしい面をもって子に接する。母親はやさしい慈悲の権化のように子にあたる。日本でのひと昔前の良い家庭というのは、おうよそこのようなものでありました。そして母親は、厳格な道義そのもののような父親の前に、いつもこどものために、とりなしの役目をはたしていたものです。父親は、めったにあまいところを子に見せてはならないものと思われていました。

厳母慈父

ところが、最近はすっかり一変したようです。逆になってしまったようですね。これが民主主義とでもいうのでしょうか。こどものママごと遊びなどを見ていても、昔はお父さんになった子がバカに威張りちらしていました。けれども、この頃では、お父さんになった子が、よく仕事の手伝いをさせられたり、お母さんになった子からしかられたり、しつけをされたりしています。これは女権の強くなった家庭風景の反映だと思いますが、教育のことでも父親が甘すぎると、こぼしている母親がよくあります。父親は朝早くから外に出かけ、夜でないと帰宅いたしません。たまにいっしょにいるとき、つい甘くなるのはいたしかたのないことであるかも知れません。そうすれば、母親がグットたずなを引きしめねばならないハメになるわけです。

厳父厳母

よびその親について調査した例によると（磯村英一教授）、「親の扶養」に関しては

親の答　四〇％　主に長男に頼り、他の子供に協力してもらう
　　　　三〇％　子供全部に頼りたい

子の答　五〇（高）四〇（短大）％、子供全部で責任をもつべきだ
　　　　三％　養老院に行ったらいい

という結果が出、養老院へ追いやると考えているのはわずか三％に過ぎない。

小山教授の調査では

「親の扶養は長男がすべきものと考える者」

大丹波（農山村）	八二％
狛江農家	七四％
狛江非農家	三七％
戸山アパート	二〇％

と出て、新しい近代家族では子供全部が親に責任を負うと考えるのが多くなってよい傾向を示している。

更につっこんで

「子は親をみなくてよいか」の問に対して

	よい	よくない	事情による
大丹波	一〇・三	八三・一	四・〇
狛江農家	五・三	八八・六	五・三
狛江非農	七・五	六四・二	二五・〇
戸山	八・二	七〇・七	一九・一

これによると新しい家族でも必ずしも親不孝な考えがふえていない。もっとも子が親をみないのが必ずしも親不孝になるか否か、いわゆる近代的な子は、老人は国家が面倒をみるべきだと考えているようだ。しかし養老制度の極度に発達したスウェーデンで、老人の自殺が多いことは、やはり金と施設だけでは解決できない親と子の心理的つながりの重要性を物語っているのではなかろうか。

前記橘教授の調査によると、大阪の女子大生は、「家庭生活をする以上老人がいた方がよいか」という問に対して「老人がいた方がよい」と答えた者が五八％を数え、老人の美点について、人生経験が深い（三七％）、やさしい、よく気がつく（共に一九％）といっているし、欠点については、時代感覚がない（一八％）頑固、世話をやき過ぎる、言葉がくどい、と痛いところをついている。老人に望むことは

時代感覚をもってほしい	三一％
干渉しないこと	一四％
偏見をもたぬこと	八％
気を若くもつこと	八％
経験で若いものを指導してほしい	七％

と述べているが聴くべき意見だろう。

パウロは老人のモラルとして「自制」「謹厳」「慎み深さ」「信仰・愛・忍耐」をすすめ、老女に対しては「慎重」「人をそしらず」「よき教育者たること」を教えている（テトス二・二）

要するに老人は

一、今の若い者は必ずしも老人を嫌ったり邪魔物扱いしていないという事実を知り、いたずらに劣等感や孤独感をもたず、社会に有用な存在だという自確と自信をもってほしい

二、常に新しい時代への感覚を鋭くし、若い者の知恵にも学ぼうという謙遜さをもつこと

三、いつも自分は老人だという自意識を捨て、一個の人間、一人のキリスト者として自由に振舞いたい

若い者は老人に対して

一、老人を尊敬し、その人生経験や知恵に謙虚に学ぶこと、体はきかなくても、経験知だけは尊い遺産である

二、老人排斥の悪風のある今の世に、教会人は卒先して敬老、親老の実を挙げたい。「老人の日」が単になぐさめの日でなく、積極的に共に生きようという心構えを作る日として行事を持ちたいと思う。

老人へのすすめ

岩村信二

CS部ニュース

シュヴァイツァー博士からこんなにたくさんもと

日本人として最初に、シュヴァイツァー博士の所で奉仕された野村実博士（日本キリスト者医科連盟会長）のもとに、シュヴァイツァー博士より「六九二一ドル余のたいへんたくさんのお金がついたが、これは日本のキリスト教関係の子供たちおよび私の働きを応援してくれる人たちからのですね」との知らせが入りました。四月に日銀の許可がおりてから住友銀行を通じて送り出したのが、やっとシュヴァイツァー博士の手もとにとどいたらしいのですが、シュヴァイツァー博士は、日本から献金が来たら建てようという予定地を作ってまっておられたようで、大変喜んで、またこんなにたくさんとはと思ってみなかった程に驚ろかれたということです。

来る九月二四日の教育週間最終日に東京の各部会では、東京部会連盟の主催で生徒大会を青山学院の講堂で開催しますが、その時に、この程、アフリカより休暇で来ておられる高橋功博士が、建築予定地のスライドやら、お話を聞かせてくださいます。

表紙の説明

この衣と三つの石は、殉教者聖ステパノのシンボルである。使徒のシンボルには、聖書にでてくる出来事や、有名な伝説におり込まれていることが、そのまま示されるのが普通で、聖ステパノの場合には、使徒行伝七・五八「彼を市外に引出して、石で打った。これに立ち合った人たちは、自分の上着を脱いで、サウロという若者の足もとにおいた」という言葉から出ている。

殉教者聖ステパノの死は、クリスマスの翌日、一二月二六日であることをつけ加えておこう。

誌代についてのお願い

愛読者皆々様の祈りや御鞭撻にささえられて、「教会教育」は、独特の味を持ち、地味な歩みながらも順調な歩みをもって今日にまで発展して参りましたこと深く御礼申上げます。

さて、前月号にお知らせ申上げましたが、皆様も御存知のように、本年六月より郵便料金の値上りと、それに伴い各方面の値上りに、郵税込の定価をつづけてまいりました本誌は、非常な痛手をうけました。創刊以来八年、物価指数の上昇にもかかわらず、本誌は、皆様のお手元に入って、なおよりよく生かされる事を念頭に、誌代は発足当時のままでがんばって参りましたが、このままでは、さらに大幅の赤字を出すこととなりますため、やむなく九月号よりはじめて誌代の改正をさせていただくことになりました。

世界的に教会の教育的使命、牧会における教育的要素が、はげしく論じられております今日、日本におけるキリスト教界の責務のために、本誌が協力し奉仕しなければならない分野がますます広く目の前に現れて参りました。何卒、創刊号より、また長年にわたって御愛読下さっていられる皆々様に、この御願いを御諒解いただくと共に、ひきつづいて御愛顧たまわりますよう御願い申上げる次第にございます。

遠く海外各地よりも二年分三年分の予約御納金いただきましたが、八月三一日まで前お金申込みの場合は、一年四五〇円で受付けておりましたが、九月以降は左記の通りになりますのでよろしく御願い申上げます。

一部五〇円（送料共）、**半年三〇〇円**、**一年五五〇円**

厳父慈母型と厳母慈父型とどちらがよいか。これは家庭の好みによって選ばれるでしょう。神さまに愛と義が結合しているように、家庭の中にも、やわらかい、やさしい、すべてを被いつつんでいくふんいきと、それとともに一面キリッとした、規律のある、一種のきびしさが必要です。それで慈と厳が、はなればなれになることなく、つまり父親と母親が（どちらの型であっても）すっかりひとつに結び合わされて、こどもに対することが必要です。ところが困ることに、ときとして、厳父厳母型という家庭があります。父もきびしい。母も厳格一点ばり。これでは、こどもは育ちません。少し前の話ですが、ある女学生が車中でつけ文をされました。その娘は入れられたラブレターを母親に見せました。りっぱなことです。それなのに、軍人の妻であった母は「けがらわしい。あなたにすきがあるから、そんな侮辱をうけるのです。あなたは不良化している」とはげしく責めました。その上、あさはかにも、輪をかけて夫に報告しました。軍人かたぎの父親は烈火のように怒り、「おまえのような不良は家におけぬ」とどなりました。とうとう、気の弱いこの娘は、海に身を投げて死んでしまいました。これでは、ほんとうに、こどもの立つ瀬はありません。もし誤って、こどもがつまずき、父親がどんなに憤っても、母親がよく理解して、やさしくとりなしてくれてこそ、正しく子の心は延びるのです。よくいわれます。こどもを押入れにいれても、感情に激しく、ピタッとふすまを締めきってしまってはならぬ、二センチか三センチ必ずあけておけと。子が反省して悪かったと気づき、「ごめんね」とわびてきたら、いつでも抱きしめてさとしてやる心の余裕を残しておかねばなりません。もし締めきってしまったら、親と子の愛情のきずなまで断ち切るおそれがないとはいえません。

慈父慈母

この型も困ったものです。父も母も子にあまい。なめまわすようにかわいがる。ついに全く愛に溺れてしまうのです。わが子のかわゆくないものはいません。狂わしいまでのせつない親心があります。そしてこれが「子を思う故に迷う親心」となるのです。しかし、ほんとうの愛には骨があるはず。聖書には、「愛は不義を喜ばないで真理を喜ぶ」（第一コリント一三・六）とあります。愛と真理は姉と妹の関係です。真理だ真理だといって冷たく扱うならば愛が泣きます。だが、愛するからといって不義をゆるし、虚偽にくみするならば、真理が苦しみます。子を愛するからといって、道にそれたようなことを平気でさせておくならば、それは正しく愛しているのではありません。それではかわいい子は滅びるのです。モンパッサンの「女の一生」の主人公がそうです。夫に裏切られ、苦心してみごもった子は流産し、ついに未亡人になった彼女は、ただひとりの息子に自分の愛のすべてをささげます。わがままなことがあっても、ひたすら子の気嫌をそこなわないように、はれものにでもさわる心地でだいじに育てます。そのはては、すっかり子にそむかれ、すてられて、わびしい晩年をすごさねばなりませんでした。最後に養老院に入るとき、そこの牧師が、「奥さん、あなたはあなたのお子さんを神さまの前にお育てになりませんでした。それで、淫売婦があなたのお子さんをあなたから奪ったのです」といいました。考えさせられるではありませんか。

とにかく父母の協力が教育に必要です。だが、親の愛といっても限られたもの。また狂いやすいものです。そこで父も母も愛の源である神の前にひざまずいて、たえず自らの姿勢をただされることが大切です。あのナザレの貧しい家に、神の子イエスは人と成られました。そして、ヨセフとマリヤとは実にこのような父であり母でした。信仰深く、ただしく、また賢明な父母でした。

山内六郎

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年九月一日発行
発行人　山北多喜彦
印刷所　精文堂印刷株式会社

教会教育 第九八号

定価五〇円（〒共）
半年分　三〇〇円
一年分　五五〇円

発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会　教会学校部
振替東京九八七一三番

